

## ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（五）：第二 三、二七、三四話和訳

岡野， 潔  
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門：教授

<http://hdl.handle.net/2324/4772798>

---

出版情報：哲學年報. 81, pp.41-106, 2022-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン：  
権利関係：



# ハリバツタ・ジャータカマーラー研究（五）

— 第二三、二七、三四話の和訳 —

岡野 潔

今回は『ハリバツタ・ジャータカマーラー』の第二三、二七、三四話の、三つの章の和訳を行う<sup>①</sup>。

作者ハリバツタは本作品を書き始めるにあたっての、序文の第五詩節で、本生活を幾つも幾つも作っているうちに菩薩の徳性（施・戒・忍辱など）を表現することがきつと上手くなるだろう、という趣旨の文を彼の抱負として述べ、「反復練習によつて養われる熟練した力」の大切さを語っている。カーヴィア（美文体文学）としての多様な修辭法（アランカーラ）の技法と約三十種類の韻律を用いた本作品の完成には恐らく十年以上の年月がかかったと思われるが、その苦心の歲月の間に彼の詩技は更に熟練度を増していったであろう。今回訳す三つの章は詩節数が多く、作品の第三と第四部類に属し、創作の後半期に作られたと考えられるが、梵語の特性を最大限に生かした構文を用いて絶えず視覚イメージに訴えながら流れるように多くの絵画的な情景の描写を連ねてゆく技法や、言葉の切れ味と意味の明晰さの両方を保ちながら最短の言葉で最上の表現を見出す技術などでまさに梵語の詩的創造の円熟の域に達した詩人の力をこれらの章で確かめることが出来る。

第二三話『カナカヴァルマン（王子）ジャータカ』は八九詩節から成る、菩薩の精進波羅蜜の話として分類される章である。梵文の欠損は無い。本章のパラレル文献として、カシユミールの詩人クシェーメンドラの書いた『菩薩アヴァダーナの祈願成就の蔓』（Bodhisattvāvadānakapālāṇā）の第一〇六章『カナカヴァルマン・アヴァダーナ』

(Kanakavarnāvadana) がある。その章の第二偈の文から、城隍經 (Nagaropamastra) の説法の後にその因縁譚として付けられていた或る本生話が、クシエーメンドラの用いたその章のソースであったと知られる<sup>⑤</sup>。ハリバッタの書いたこの第二三話は、後の十一世紀になって作られたその第一〇六章と同じソースに基づいたものかどうかは確かではないが、両詩人が同じソースを用いていると仮定するならば、その第一〇六章はハリバッタがこの話の創作においてどの程度ストーリーを改変したかを推測する手がかりを与えてくれる。それ以外のパラレル文献は現時点で見つかっていない<sup>⑥</sup>。そのため私は本話のソースに関する資料として、その第一〇六章の梵文を和訳して、本論文の終わりに付けた<sup>⑦</sup>。

ハリバッタ第二七話『〔医師〕ケーシャヴァ・ジャータカ』は全部で九七詩節から成り、本作品中で三番目に長い章である。智慧波羅蜜の話に分類される諸章での最初の章にあたる<sup>⑧</sup>。菩薩が医師として、夫が死んで狂気に陥った一人の婦人を探してその心の病を癒すという、実に興味深い内容をもつ章であるが、梵文テクストには章の末尾に欠損がある。梵文写本の第七三〜七四葉が失われているため、この章の第九二詩節の途中（第二パーダ）から章の最後まで梵文テクストが欠けている。その梵文の欠損箇所において、私はチベット語訳から和訳をすること、訳の補填を行った。なおこの第二七話はいかなるソースに基づいて作成されたのかは明らかではない。本話のパラレル文献は数少なく、それらを参照してみても、説話の内容のうんと短い要約が情報として在るだけなので、未だソースの解明には至っていない<sup>⑨</sup>。

ハリバッタ第三四話『シェーナカ（仙）ジャータカ』は本作品の最終章であり、七四詩節から成る章で、梵文の欠損は無い。この話のパラレル文献については、部分的に話の展開が似る仏教説話であれば二つほど指摘できるが、話型の全体が合致する説話は今のところ見つかっていない<sup>⑩</sup>。ハリバッタが自分の作品の最後になぜこのような、インド仏教の内部であまり知られていない、主人公が国王に対して出家を勧めるという内容の話を選んだのか、様々

な憶測が立てられよう。本話は、国王という荷の重い世俗的な地位にある者についての、詩人の宗教的な立場からの意見表明とも受け取れるが、これは特定の王を想って書いた、秘かなメッセージなのであろうか。それとも、詩人がこの第三四話で伝えたかったものは、自身が歩んだ人生への思いなのだろうか。チベット訳の末尾にあるコロフォン<sup>8)</sup>の文で、作者ハリバッタが「王の息子」かつ「阿闍梨」(Acarya)と呼ばれていることに注意される。もし彼が王家の出身であって、また阿闍梨の言葉が出家者としての軌範師であることを意味するとすれば、この第三四話にある「国王の出家」というモチーフは作者自身の人生の生き方と関わっているといえよう。

### 第三話 カナカヴァアルマン王子ジャータカ

あらゆる生物の苦しみを鎮めようとの誓いを自らに課している智者が、「まして」親族知人を災禍から救うであろうことは、疑いがありません。(三三・二)

◇ 次の様に伝え聞いています。——一つの園林には睡蓮が花ざかりの蓮池があるのと同じ様に。あるいはまた、『夜』(「の女神」)の顔において『秋雲』という白い薄膜が途切れたために「輝く」淨らかな月光があるのと同じ様に。あるいはまた、雨の季節において蔓のような稲妻があるのと同じ様に。あるいはまた、青春期において「肉体の」美しさがあるのと同じ様に。あるいはまた、女たちの顔の上に額飾り(ティラカ)の輝きがあるのと同じ様に。あるいはまた、出家者たちのもとに『忍辱』があるのと同じ様に。あるいはまた、「国の」支配を願う「王」のもとに『統治の学』があるのと同じ様に。あるいはまた、富貴の人ののもとに『育ちのよさ』があるのと同じ様に。あるいはまた、良家の人ののもとに『学問の豊かさ』があるのと同じ様に、まさにその様な、大地の円(マンダラ)の上にある一つの装飾品の如き「都」、——

(a) 乞い求める人々に絶えず衣食を提供する都民の豊かな富財の精華であり、(b) 神々の王がもつ栄耀豪華を思わせる極めて快美なところ、(c) どの季節にも「適した」快適な資産家たちの邸宅があり、(d) マンダラ山の頂（シカラ）に形が似た寺院があり、(e) 集会場で作られては上演される様々な語り物や笑いに歓ぶ人々がおり、(f) 客人たち（物乞いに来た人々）に対して母のように「接待し」、(g) まるで偉大なヨーガ行者たちが化作して創った一切合切のようであり、(h) 甚だ大きな賞讃を「異国からも」得ており、(i) 種姓（ヴァルナ）と生活期（アーシユラマ）において伝統法の維持が守られ、(j) 飢饉や死をもたらしかなる災害も無く、(k) 絶えざる祝祭のために俳優たちの集団が忙しく働く、(l) 夥しい瑠璃・サファイア・ルビー・エメラルド・黄金（カナカ）がある、カナカーヴァティーという名の王都がありました。

その「都」において、(a) 「国王の有する」三種の力によってあらゆる近隣の小国を従え<sup>9</sup>、(b) 日々「適正な」裁判によって「政の」權威を増し、(c) よく澄んだ間諜の目によって他の王たちの出来事を観察している、(d) 象・馬・車・宝蔵・歩兵を十分に所有する、カナカ（黄金）という王<sup>10</sup>がおりました。

敵たちは恐怖のあまり、「戦鬪の」熱狂的気分の発生が消え失せ、刀や弓を握る力が緩みました。ライオンがもつ矜持に象たちが抗することが出来ないように、彼らは戦鬪において、その王の矜持に抗することが出来ませんでした（<sup>10</sup>。〔三三・二〕〔八・一一〕）

鳥たちが安らぎを求めて、いつも一本の果実ある樹木のもとで憩いを得るように、人々は安らぎを求めて、大きな威光を上げたその王のもとでいつも憩いを得ました、相互に要望と幸福感とが増大させた繁榮を得ながら。

〔三三・三〕〔八・一二〕

◇ (a) このような徳性と力を持ち、(b) まるで月の光線の束のように白く皎々と輝く『名声』という薄布によって『諸方の空間』という女神たちの顔を覆い隠すかのような、その王<sup>11</sup>は、まるで神々の王のように飽きることなく五官

の快樂を味わっていましたが、一さて時が流れて、或る時、

マドゥーカの花のように白い頬の美しさをもつ王妃は、「お腹に」胎児という名の、名声の蔵たるお方（菩薩）を宿しました。「彼女は」まるで (a) 欠けることなく満ちた〔十五夜の〕、(b) 光明を放っている、(c) 美しい月の円盤を宿した、『東の方角』（「空の女神」）であるかのようでした。（三三・四）

あたかも〔朝の〕新しい熱光を發する太陽を産んだかのように、かの夫人は (a) 威光に燃え輝いている、(b) 火の息子（スカンダ神）に似た、(c) 宝蔵のように人々の眼を悦ばせる、(d) 美しい、(e) 名声の蔵である息子を産みました。（三三・五）

◇ その時、黄金の山（メール山）のように威光に燃え輝いている息子を見て歡喜したカナカ王は、彼の偉大な都城を〔祝いにより〕甚だ美しい有様に変えました。柔らかな風に吹き動かされている色とりどりののほり（幡）によって街路の内部が飾り立てられ、また、塔門には花綱が付けられ、花々の香りに惹かれてそのあたりを蜜蜂の群が飛び回り、また、派手に輝く裝飾品で〔わが身を〕飾りたてた市民たちが歡喜しており、また、甚だ沢山催される踊りと歌によって歡笑が起こり、また、牢獄に閉じ込められていた囚人たちが〔恩赦を受けて〕解き放たれて、また、再生族や賢者たちやその信奉者の集まりに対して供養が施された、〔そんな喜ばしい都の有様に〕。

その息子に、吉祥なる太陰日と時刻と星宿の時に、カナカヴァルマン（黄金の鎧）という名を両親は付けました。樹に現れた花々が将来の果実を予告するものであるように、彼の相好（身体的特徴）は〔彼の〕将来の偉大さを予告するものでした。（三三・六）

ほぼ八歳になった時、〔すでに彼の〕威嚴のオーラは若者のようでしたが、その彼を王は〔就学の〕弟子として、知が偉大である者たちのもとに行かせました。（三三・七）

〔容易にほごけない〕疑問の結び目を断ち切る、彼がもつ鋭い智慧の諸徳性は、論書の意味内容を良く知る教師

たちをも、「その理解で」凌駕しました。(二三・八)

〔彼の精神に宿った〕諸徳性は、まるで「いつかあの菩薩が生まれれば、我々の居場所が生まれるだろう」と言つて、熱望をもつて彼の誕生を待ち望んでいたかのようにでした。(二三・九)

布施・戒・忍辱などの諸徳性が彼「という人格」の中に入り込みました。あたかも水面が睡蓮に飾られている池に蜜蜂たちが入り込むように。(二三・一〇)

ふさわしい器のみにおいて、「人格的」諸徳性はそこに居を定めるのです。「例えば」燦めき輝く真珠たちにとつて、河に在る二枚貝は「彼らにふさわしい」器ではありません。(二三・一一)

その後、彼の肉体において「若者の」美しさを構築した青年期が、あたかも「彼から離れたくないと」惜しがる少年期を追い出したかのようにでした。(二三・一二)

かの王子は良家の子であることから、情欲(マダ)発生の原因たる青春期が起こつても、「よく調教された」善い雄象のように、礼儀作法によつて躰けられた心をもち、不品行に走ることがありませんでした。(二三・一三)

◇ さて、やや時が経つてのち、かの王妃は(a)美と繁栄の女神(シュリー)が「地上に肉体を得て」具現化したかのような、(b)あらゆる人々の心に適う愛らしさの、一人の娘を産みました。それはまるで宝石の細い棒が一本の輝く光線を生じるかのようにであり、或いは白分の時(月が満ちていく期間)に夜が月光を生じるかのようにでした。親族の者たちは「誕生した」彼女にカナカプラーサー(黄金の光線)という名を付けました。

その後、愛神(カーマ神)の支配する所である青春期「を迎えること」によつて、容姿の美しさが倍以上に高められたつあつた彼女は、まるで春の季節によつて現れ出た花々によつて種々の樹のまわりの地表が飾られている森の木立の立ち並ぶ小道のように美しく輝いて見えました。ある時彼女は(a)朝の太陽の光に輝いている、(b)まるで明るい(橙色の)サフラン(の塗香)を塗られたかのように見える、宮殿の屋上で、女友達の群に取り囲まれて、毬

遊びを楽しみつつ、蔓のような細い腕を上下に揺らしていましたが、それはまるで風によって蔓草のつるが曲がりたり伸びたりしているかのようでした。

その細身の体は燦めく装飾品の寶石が発する光線の帯に飾られており、その両胸は〔まるで〕切れた真珠の首飾りの糸からこぼれ出た沢山の真珠が散らされた二つの黄金の丸い宝石箱そっくりの有様で、またその揺れ動く瞳のために白黒まだら模様になったかのような眼、まるで蜜蜂の群が追う睡蓮の花びらのような眼は、左右に激しく動くことで、まるで四方の空間を動かし抜けるかのように見えました。

疲労によって〔額に〕生じた微細な汗の粒の列なりが朱色の額飾りを侵しており、〔激しく〕振り動かしたため耳の飾りと髪の毛がすっかり崩れてしまった彼女は、友人たちから「ねえ、あなた、この毬遊びを楽しむのもうおやめなさい。あなたはもうすっかりお疲れですわ。新鮮なシリィシャ(アカシヤ)の花のように華奢なお体をおもちのあなたにとつて、強烈な太陽光は疲労困憊の原因ですよ」と止められたので、遊びをやめて、上着のへりで、顔にとつては邪魔である液状化した『美』の如き汗の粒の連なりを拭いながら、椅子に座って、付き人たちが扇ぐうちわの風に接して目を閉じ、体を休めていましたが、〔ふと〕彼女は(a)宮殿の近くを歩いてゆく、カーマ神をおもわせる、(b)やや成年に近づいたため美しさに満ちた、カナカ王の大臣の息子の上に〔目を留めると〕、ため息があらわす恋慕の〔心の〕動揺をもち、瞳を動かさずに、ずっと〔彼を〕見つめていました。

一方かの大臣の息子も、恋心を表すため息をつき、彼の『眼』という蜜蜂は懼れに満ちて、酔っているかのようには、『微笑み』という可愛らしい花をつけた『若い娘』という蔓である彼女に向かいました。(二三・一四)

歯列の輝きとして、頬笑みの美をまぶしく放つ、彼ら二人は相互にじっと見つめ合いましたが、〔その時〕彼の二つの心は愛神が弓を引いた『愛』によって、たちまち一つに合わさりました。(二三・一五)

愛神という漁師が投げた、若い娘の輝かしい『美』という釣り針によって、『落ちつきのなさ』という池の端を

泳ぎ廻っていた一匹の魚であった、大臣の息子の『心』という魚が捕らえられたのです。(二三・一六)

その時、齒の美しい〔微笑んだ〕彼女が、絵に描かれたかのような〔動かぬ〕姿で、其処で〔彼に〕視線を釘付けにしているのを眺めて、女友達の群は暫くの間笑い、彼女は〔羞じて〕少し顔を伏せました。(二三・一七)

親しいその女友達が皆立ち去って、王女も家の中に入りました。大臣の息子も恐れを激しく抱いて、彼女のこゝとばかり心で思い耽りながら、家に帰りました。(二三・一八)

◇ さてそのうち、このように『相手の姿を』眺めることだけ』という供物〔を投下されること〕によって愛の焰は益々増大し、(b)頬が青白くこけてしまつて、(c)絶えざるため息・不眠・じつと動かない目〔という特徴〕のために、付き人たちによつてお互いの有様が知られている、その二人の身体は〔共に〕ひどく瘠せ細るにいたしました。

冷静な判断が欠けているため妄想に支配された人々を、弱点となる穴〔侵入路〕を探している愛神は、心の異常な状態に導くものです。(二三・一九)

◇ さてある時、催された祝祭に悦びながら様々な活動に忙しく立ち働く人々でいっぱいになり満ちた王の宮殿において、久しく前に没した太陽の残照によつてまだ西の方が紅く染まつている時、――

青い頸をした孔雀たちが止まり木に戻ろうと願つて、上の方を向きつつ頸を左右に振り動かす頃、――

若い娘たちの眼の瞳が青黒い『闇』という薄膜に覆われ、〔足下の〕地面が平たいのかどうかを判じかねる頃、――

点火させられたランプの輝きによつて家々の内部がオレンジ色に変わる頃、――

大空の上のあちらこちらに曜星たちが姿を現しつつある頃、――

〔暗がりの中で〕離ればなれになつて会いたいと切望する番いのチャクラヴァーカ鳥のいる蓮池がすっかり睡蓮の花を閉じてしまつた頃、――

東の空において輝き始めた兎の相をもつ月が円盤をまだ少し山の頂に隠しているその頃に、〔逢曳の〕約束をも

らった大臣の息子は、金の音を鳴らす足環で両足を飾り、黄金帯と紐帯で臀部を飾り、若い女の胴着を着、人工の乳房で「胸を」持ち上げ、新鮮なバクラ（ミサキノハナ）の「頭に巻いた」花環を満たして溢れた髪の毛を肩に垂らし、額の真ん中に朱でチトラカ（額標）を描き、踵まで垂らした薄地の暗青色のコートをつけ、長く垂らした緑色の織物のヴェールを巻いて、女の変装をし終えると、一人の女召使いの後ろを歩いて、「これはカナカプラーバーサーの女友達だろう」と門番や大臣たちが安心している中を、王の住まいに入り込み、特別なおめかしをした「かの王女」が「いったいあの大臣の息子は妨げられないで来られるのかしら」と不安に心を震わせて、腰掛けから立ち上がった。立ち上がって出迎えることを忘れてしまっているその王女に、誰にも知られない場所でその時に適した話をするこゝとで、信頼と安堵を生じさせました。

恥じらいのため少し顔をうつむけている「王女」を覆っている薄織物は、両乳房が呼吸に激しく震えるなか、「その体から」滑り落ちました。腕輪は「抱く」手を振り動かすたびに震え動いて、その彼女を、愛によって大きくなった歓びの情感をいだけ彼は悦ばせたのでした。<sup>〔三三・二〇〕</sup>

◇ 愛が「彼に」強い情欲を増大させたため、更に五日の間、前と同様に女に変装した彼は、カナカプラーバーサー、金色に輝く女、よい香りの言葉を放つ女<sup>⑪</sup>、申し分のない美しさによって愛される女<sup>⑫</sup>、額飾りの先端が快楽の行為の間に「汗の滴りによって」拭われ消えてしまった、その「王女」と彼は愉しみました。<sup>〔三三・二二〕</sup>

◇ ある時、女装と装飾品を体から外したまま、性の快楽の享受にひどく疲労したため、増大した気持ちのよい眠気に寝入ってしまった夜明けの時間が来たことに気づかぬままに、王女と一緒に寝台で横になっているその彼を衛兵たちは発見し、「なんとということだ」と叫んで、王に報告しました。かの王は猛烈な怒りに駆られる性格であったた

め、眉根を寄せ、眉を吊り上げて、「このような家門の汚辱は、あつてはならんことだ。行け、下劣極まる大臣の息子と一緒に、この者（娘）を死神への捧げ物にせよ」と命じました。「かしこまりました」と答え、王の命令を受けた彼らは、後ろ手に縛られた大臣の息子とカナカプラーバーサーを共に追いついてゆき、無慈悲・残忍・冷酷な心をもつ死刑執行人たちに渡しました。

恐るべき『官能の享樂』という蛇たちは、知性からの助言を受けずに僅かな快樂に夢中になった者たちを、破滅に導くものです。（二三・一三）

(a) 荒れ狂う音を立てる、(b) 起こつたばかりの雨雲のように真つ黒な『煙』を着た、(c) 憤激したかのように震え燦めく『焰』という多くの舌を広げる、燃え輝く火の中へと、「その焰の」美しい姿を味わい楽しむ一匹の蛾は落ちてゆきます。意志薄弱な者たちにとって、自分自身の感官より恐ろしい敵は存在しません。（二三・一三）

◇ その時、かの王女は去り行く時に、自分の宮殿の中庭にいる兄のカナカヴァルマンを見つめました。眼に涙を溜めたまま、羞恥によつて何もしゃべることが出来ず、顔をうつむけたままです。かの大臣の息子は、彼自身のその状況にもかかわらず、次の様な威勢のよい言葉をカナカヴァルマンに語りました。

「罪を犯した男たちに対して、このような懲罰を王が下すことは実に正しい。ただとても揺れやすい心をもつ女たちに対しては、罪を犯したとしても、死刑（を課すこと）は決して認められるものではない。（二三・二四）

それ故、君は憐れみを懷いて、妹であるあのひとを、大変な危機から全力で守つてやつてくれ。私（自身）はいま、『譴責』という果を得た（罪の）行為によつて、死王（ヤマ）の都に入ることを望む。（二三・二五）

私については、罪を犯し、自分を穢し、法を冒したのであるから、死ぬことが最もよいのだ。なぜなら人は死ねば、いかなる者の叱責する苛烈な言葉も、もう聞かずにすむから。（二三・二六）

〔その時〕その王女の、軽率な行為をしてしまい、怯えた雌鹿の眼のように大きな眼をしている、心の中にある

「どうか助けて！」という懇願の言葉が、数粒の涙の雫となって〔彼女の眼から〕溢れ出たように見えました。  
〔三三・二七〕

カナカヴァアルマンは剛勇心をもって、ただちに鎧を着けました。菩薩として不屈の精神をもって生類のために善性を厚く蓄えてきた、広大な覚知をもつ彼は、その二人〔の囚人〕を奪取して、駿馬によって速く走る車に乗せました。〔三三・二八〕

◇ その時、或る幾人かの親友たちは菩薩を深く愛する故に、戦慄した心で〔彼に〕縋って、次の様に言いました。「一体、猛烈に怒った王たちに対して、自分の存在をまっとう出来る者はいない。もし火に触れるなら、供物を捧げる祭官（ホートリ）であろうと、焼かれてしまふのと同じだ。〔三三・二九〕

◇ それ故、この自分の命を顧みない、果敢な行為をやめるべきだ。」——菩薩は答えました。「たとえもし仇敵であつても、さしあたって危難に陥っているなら、人は力の許す限り救わねばならない。まして親族知人であればいうまでもない。諸君、次の点を考慮しなさい。

生類を益することを望む者は、阿鼻地獄の巨大な焰の前で、もし一人の有情が大きな苦惱に襲われているならば、自分の身が焼かれる苦を考えずに、敢えて彼の安楽のために〔地獄に〕赴きます。〔三三・三〇〕

◇ こう言うと、かの偉大な心の人（菩薩）は、弦を張った弓を掴み、御者に命じました。「さあ今、馬たちを駆けさせなさい。」——「承知しました」と彼は答え、突き棒で軽く突いて、馬たちを手綱〔の引き締め〕から自由にして、最高の速度で走らせました。

かの立派な城を出ると、(a)車の速いスピードのために〔周囲が〕まるで堤を壊した濁った河の激流となって流れているように感じられる、(b)馬のひずめからマングースたちの〔飛び出る〕ような灰色の大量の埃が捲き起こされている道を彼は眺めながら、〔やがて〕

(a) 車輪の音に驚き怯えた鹿の群が散り散りに分かれてゆく、

(b) 「森林火災の」火によって焼かれている乾いた草や竹の繁みがあり、(c) 泥だらけの「野生の」森の水牛によって擦られたため「泥で」下の部分が黒く汚された樹々の幹がある、

(d) サファイアの破片のような「地に散らばった」孔雀の尾羽の月輪によってまだら模様となった地面があり、(e) 熊の爪に裂かれた蟻塚の穴からたくさん溢れ出てきたマドゥーカ(アカテツ科高木イリッペ)の花糸のように乳白色をした白蟻の群のいる、

(f) 象の群によつて破壊されつつあるシャツラキーの樹々から生じた芳香が漂う、山林の奥へ着き、「さあ今、馬たちの速度を抑えて、停めなさい」と御者に命じてから、次の様に語りました。

「この、四方八方を山々によつて壁のように囲まれている、森林の奥の、人が近づき難い場所に私たちは居ます。私が護りに努めますので、君らは心を堅固に保ち、恐れを捨てなさい。」(二三・三二)

◇ その時の王はその出来事を知ると、憤激のあまり息子への愛情を失い、菩薩を捕まえるために、太陽光を反射して槍の穂先が煌びやかに輝く、鎧を着けた軍隊を派遣しました。速やかに幾人かの武人が菩薩に近づいて来て、言いました。

「どうか、罪により罰せられるべき大臣の息子と、かの王女をお渡しください。武勇の輝きが世の隅々にまで達しているお父上のご命令に、あなた様はなぜ従わずに抵抗するのですか。」(二三・三三)

◇ かの偉大な心の方(菩薩)はそれを聞くなり、斜めに胸の所に掛けていた弓を掴み取り、「御者よ、この車を転じなさい」と命じました。彼の命令に忠実な御者がその立派な戦車を回転させて、来た方に戻るや、

その「王子」がアオサギの羽がついている矢を手で握ってえびらから取り出したのを見て、王の軍隊は落胆し、気落ちして、少しの間瞬きもせず見つめたまま、まるで絵のように停まったままでいました。(二三・三四)

◇ 菩薩は言いました。「諸君、徒勞で終わる空しいことはしないことだ。

私は本来努めて守るべきである〔自分の〕この命を、一握の塵芥のように捨てるつもりだ。決して、救いを求めて、恐怖に陥った眼をもつ者を見捨てたりはしない。」(二三・三四)

◇ その時、その兵士たちは彼のその覚悟を知って、互いに次の様に語りました。

「あの王子は貫通が難しい装甲を着け、また大変な武勇をお持ちの方である。またあの方はとても急峻な所に位置している。それ故此処での我らのこの戦いは不毛な徒勞で終わる。」(二三・三五)

実に、事が大きくて手に負えない時は、たとえ人々が望もうとも、全く徒勞に終わるものだ。「例えば」蛾たちがたとえ落下しようとして、『寶石の光線』という焰では、揺らすことが出来ないように。」(二三・三六)

◇ 「殿もいつかご子息の捕縛を後悔なされるに違いないし、我々にとつて退却こそが適した手であろう」と、そう決めて、その軍隊は来た道をまたそのまま引き返して、戻って行きました。

他方、菩薩はゆつくりとした蹄の運びで進みゆく馬たちに戦車を曳かせながら、その山森を越えて行きました。やがて、紅土の塵によって紅くなった象の頭部の丸い隆起そっくりの太陽がメール山の頂に懸かる頃、――

道路から埃の焼けつくような熱が失せた頃、――

鹿たちの群が自分たちの棲み処に戻りゆこうと願う頃、――

樹のうろの中から梟たちが飛び出す頃、――

ニヤグローダ樹(バンヤンジュ)の枝に〔帰巢して〕止まっているカラス・鷺・バーサ鳥・アオサギたちが枝葉の繁みを翼でしきりに動かしている頃、――

生肉を欲してジャツカルたちが身を震わせながら町や村の近くにやってくる頃、――

悪党・凶暴な輩・盗賊たちの好む時刻に、「菩薩は遠くに」薪の煙の立ち上るのを見て、「あそこに都城があるか、

または隊商の一団がいるに違いない」と考え、御者に告げました。「御者よ、「雨季の」新しい雲の塊に似た煙が見られる、あちらの方角へ車を走らせなさい。」——しかし少しの距離を行つた道の途中で彼らは皆、この都城は無人だと気づきました。すると大臣の息子は菩薩に言いました。

「この都城は〔たしかに〕環状囲壁や壁が崩れ落ち、道路も塞がっています。しかし大きな名声の輝きをもつ君が今日到着したからには、やがて再び快適で美しいものになることでしょう。まるで〔ずっと昏睡していた〕生き物の体が再び意識を取り戻すように。〔三三・三七〕

『徳性』という〔心の〕寶石をもつ人たちがいないのなら、その土地は人々が住んでいようと、私に言わせれば、無人の地です。〔例えば〕美しさを欠いたアルカ樹（アコン）の林がたとえ花や実を生じても、それが園林（遊歩林）になることは決してありません。〔三三・三八〕

◇ 御者も言いました。「私も全く同じ〔将来の〕展望をもちます。それ以上、多言が必要でしょうか。

〔いつの日か〕象や子象の肩の上に象使いが乗り、また(a)両脇腹まで覆い拡げた装甲をつけた、(b)付き人たちにくつわを握られた、(c)口中で溜められた唾液の泡のかけらを〔口の端から〕吐いている、(d)空の鞍をつけた馬たちを伴って、この都城の中を行進するでしょうあなた様の行列は、周囲が人々で賑わっている宮殿の門を〔到着点として〕指し示すことでしょう。〔三三・三九〕

◇ その時菩薩は、(a)馬車の車輪のリムに押し潰され粉碎された泥や木のかげらが〔散らばって路上に〕ある、(b)また倒れた柱や塔門や彫像の〔あちこちに〕ある、

(c)寺院の門扉の上から落下した茶色い鳥の卵の殻が〔散乱して〕地面の上に斑点を作っている、

(d) 貴人の家の門に立てられたはたほこ（幢）が半分斜めに傾いて、孔雀の首の羽毛〔の飾り〕がその先端から脱落している、

(e) また生え出たヴィーラナ草(ベチバー)の伸びた茎葉によって道路の途中が歩けなくなっている、  
(f) わずかに供儀用のギーの残る油皿のかわらけの中に立ち、じつと動かない蟻たちがいる、  
(g) 兎の腹のむく毛のように柔らかいアルカ樹の綿毛と混ざって出来た塵埃の団子の輪が風によって吹き動かされている、

(h) 長い歲月の間に台から転げ落ちて供物への愛好も消え失せた木製のガネーシャ像が木の根元に坐っている、ひどく凄然たる光景を見、

また或る場所では、猫が身動きせずじつと野鼠たちの立てる音を聞いている姿を、また或る場所では、マンガースに「体を」断ち切られて恐ろしい蛇がのたうっている有様を、(二三・四〇)

また或る場所では、木製の立像が蟻塚によってすでに半分覆われてしまっている有様を、また或る場所では、ニヤグローダ(バンヤンジュ)の群葉が驚たちの糞によって「覆われ」穢されている有様を、(二三・四一)

また或る場所では、(a) じつと動かぬ蜂たちのいる、(b) 目立つしみの斑点だらけの鎧のような暗い色合いをした、沢山の蜂の巣が家の垂木の列に並んで張り付いている有様を、(二三・四二)

また或る場所では、カラスたちが梟の羽ばたく音に恐怖して「樹上で」眠れずに取り乱している様を、また別の場所では、「口から吐く」炎を伴った雌ジャツカルの吠え声によってとても不気味で恐ろしい「闇夜の有様」を、(二三・四三)

また或る場所では、薪の火によって地面の「描かれた」マンガラが照らし出された様を、また或る場所では、蓮根の繊維の白さをもつ人間の骨が積み重なっている有様を、(二三・四四)

また長い時を経ても匂いがわずかに残っている、山と積まれていた酒やウツドアップル・ジュースの夥しい大小の瓶たちの、今や崩れ落ちてしまつて、幾つかが割れたり砕けたりしている、酒屋の店の片隅の有様を、(三

また或る場所では、羽が脱落して剥げてしまった割れた矢柄、緩んだ弦、ぼろぼろに朽ちた矢の木片が至る所にうち捨てられているため「そこが」弓の射手たちの住居であったことが明らかに知られる「跡」を、(三三・四六)

また或る別の場所では、皮が裂けている一つの太鼓、そして鶏たちの尾羽、沢山の牛の穢い角がいちめんに屋外に散らばっていることよって「そこが」チャンダーラたち(不可触賤民)の小屋であったことが知られる「跡」を、(三三・四七)

また、落ちて散乱した花々や、落下して砕けたマトリ(母神)たちの「神像の」列に覆われているシヴァの神殿の内陣の地「の有様」を、また、うち捨てられたままの歩兵たちの遺骸が密集している戦闘の激戦地の様子を示す「跡」を、(三三・四八)

また、宮殿の壁が倒壊したために押し潰され、干からび萎れているプランテンの林によつて「その有った場所が」示される、王宮の中庭「の跡」を、また、梟やバーサ鳥(猛禽類の一種)が好んで来るナツメの木に絡みついて伸びた瓢箪の蔓の上にある蛇の抜け殻「の光景」を、(三三・四九)

また或る場所では、「宮殿の」内部で、巢から落下して液体の中身「が流れ出た」鳩の卵の半欠けの殻が積み重なって沢山ある、屋敷の床「の有様」を、また別の場所では、いちめんに「落ちてている」鋭くて白黒まだらのヤマアラシの古い針や新しい針に「床が」びっしり覆われている「光景」を、(三三・五〇)

また或る場所では、(a)軸のところ革紐に「擦られ」へこんで、(b)もう凝乳の攪拌に用いられることがなくなった、攪拌棒が山のように沢山置かれている牛乳「攪拌」の作業所であった「跡」を、また別の場所では、(a)「籠の」木棒が壊ればらけてあちこちが抜け落ちた、(b)古びて汚い、九官鳥の鳥籠がいちめん散らばって

る〔有様〕を〔見ました〕。(二三・五一)

◇ 菩薩は連れの者たちと一緒に、或る場所で宿泊しましたが、夜の時が過ぎ去って、目覚めた鴉たちの声が梟の棲むニヤグロダ樹の洞にむかつて猜疑を示しだす頃、――

天空にある星々のマンダラが〔霞んで〕まばらになつてゆく頃、――

寡婦の頬のように青白い瘠せた円盤となつて月が『日没山』(西の地平線)の頂に懸かる頃、――

蓮の茎に足を取られてよろけている番いのチャクラヴァーカ鳥たちが互いに身を寄せ合つて喜ぶ頃、――

月の手(月光)による抱擁を失つた悲しさから〔夜咲きの〕睡蓮の叢りが花を閉じてしまった頃、――

あたりを飛び回る蜜蜂の列というヴァツラキー(弦楽器)の音によつて目覚めさせられた〔昼咲きの〕睡蓮たちが欠伸するかのように口を開けつつある頃、――

『蓮池』という美女たちが、揺動する『波』という手に触れられている岸边に付着した『泡』という腕輪を嵌め、甘美な音を発する『ハンサ鳥』という足環を着ける頃、――

満開のジャヴァー(ブツウゲ、ハイビスカス)の花々を山積みにしたような〔真紅の〕円輪を太陽が現し出す頃、――

幼い太陽光によつて山々の頂が徐々に赤色に染められてゆく頃、――

その〔夜明けの〕時に合わせて〔菩薩は〕寢床から起き上がると、あたりを歩き回つてその都城を観察し、次のように考えました。

「ああ、この都城は鳩の鳴き声によつて次のように語るかのようだ。『此処にはかつて多数の論書によつて高められた〔知的な〕良き会話があつた。優雅な味わいによつて楽しい演劇が此処にはあつた。それなのに、いったい何に依つて〔かくも〕脆く滅び去つてしまつたのか、これが『無常性』に依るものでないなら』と。」(三

◇ その後其処で、(a)少しも利用されなかつたために芭蕉樹の葉や、緑のシャイバラ水草の膜によつて覆われてしまつている人工池の水がある、

(b)また猪によつて鼻先で掘り返されたバドラムスター草(カヤツリグサの一種)やカシエールカ草(オオサンカクイ)があり、(c)ひどく高く伸びた草藪の中に没しているマンゴーやティラカ樹(ハイノキ)やチャンパカ樹(金香木)の幹がある、

(d)また「水辺に」降りてきた野生の水牛の角によつて「花が」激しく動かされるたびに飛び立っては止まる蜜蜂たちに満ちた池の睡蓮がある、廃れた遊歩林へ、過ぎ去つた時の美について沈思しながら、「菩薩は」入つてゆきました。

すると其処で、(a)古びた汚れた衣で身を覆い、(b)束ねた髪が「ほどけて」少し乱れており、(c)花が咲いた枝を手に掲げたままで、(d)猿をじつと観察しているうちに「猿への」好奇心から自然に生まれた微笑みが現し出した宝玉のように「美しい」齒の燦めく光線が明るく照らすまるでバンドゥーカ樹(ゴジカ)の花のように紅い唇をもつ、(e)装飾品が無くて心を惹きつける、(f)熟したココナツの果実に似た「豊満な」両胸のある、(g)まるで『雲』という住まいの内部で戯れている『稲妻』という「輝く」娘を思わせるような、(h)花を摘み集めている、一人の女を彼は見ました。そこで近づいて尋ねました。

「(a)まなじりの限界(耳元)まで目の縁が達する「大きな眼の」、(b)まるで貝殻の中にある真珠が人間と化して現れたかのような、(c)世の人に未だ見られたことがない容姿の美しさをもつ、あなたは、どうしてこの無人の都城にいるのですか。」(二三・五三)

◇ 彼女は答えました。「私は王女です。六十の数のヤクシャ(夜叉)によつてこの都城の男女と象・馬・牛・水牛がすべて喰ひ殺されました。親族を襲つた殃禍への悲しみをいだく幸薄い女である、この私ひとりだけが、残忍な

彼らによって、自分たちの召使いにする目的で残されたのです。

薪の煙によって灰色がかった、あのニヤグローダ樹がありますが、あの方角から、あの醜悪な姿のヤクシヤたちは急襲してやって来ます。(二三・五四)

それ故、あなたはどうか懸命のご努力をなさって下さい。人が幸せを得るには、何処でも、どんな時でも、不  
放逸〔の努力〕が必要なのですから。(二三・五五)

◇ また、大きな天運をお持ちの方よ、

よい宝石が自らの輝きによってその素性を物語るように、あなたのお姿は〔生まれの〕偉大さを物語っています。しかし女というものは些細なことしか知らないものですから、私はあなたのお名前をぜひ知りたいのです。」

(二三・五六)

◇ そこで菩薩は、彼女に〔これまでの〕あらゆる出来事を語って聞かせました。すると睡蓮の花びらに形が似た足の親指で地面の上に薄く線を描きながら、そして蔓のような腕から垂れている衣服の裾を軽くぶらぶら揺らしながら、美しく顔を真下にうつむけた彼女は〔秘かに思いました〕―「ああ、もしこの方が〔私に〕妻になるよう、求愛してくれたなら、私が女として生まれたことは甲斐があったことになるのに。しかしもし私がいま好意をもたれているとしても、女として恥ずかしくて〔自分の方からは〕告げることが出来ない。心で願っていても、女がどうやって『私はあなたを慕わしく思っています』などと愛する人に告げられようか。むしろ私は思わせ振り〔言葉〕によって、自分の想いを彼に示すことにしよう。」―このように考えると、菩薩に言いました。

「私の心中にある願いを少しあなたに打ち明けたいと思っただけですが、しかし私の羞恥心がなんどもそれを繰り返して邪魔するのです、まるで異妻〔夫のもう一人の妻〕のよう。」(二三・五七)

偉大な知性をもつ彼は、彼女の〔言った〕その意図を理解し、羞恥にうつむいている、大きな目をしたその美

貌の〔王女〕を娶りました。(二三・五八)

それから古い〔無人の〕都に帰り、彼はその〔生き残った王女〕を伴って住居に入ると、彼女を得たことを手短かに語ってから、ヤクシヤたちの来襲について彼らに報じました。(二三・五九)

彼は戦いのため、急いで御者に武器類を戦車に積み込ませ、馬を繋がせました。矢に弦を張りつつ、唇を噛みしめて、体を直立させて立ち、すぐに黄金の鎧を着けました。(二三・六〇)

かのグヒヤカ(ヤクシヤ)たちは速い足取りでこちらにやって来ましたが、立派な戦車に乗って肩を怒らせたかの〔王子〕を見ると、怒りによって火と燃える眼を輝かせて、焰を発する鋭い切っ先の矢を放ちました。(二三・六一)

鎧に覆われ、がっしりした肩をもつ彼の体の上に、グヒヤカから発せられた矢が音を響かせましたが、〔それらの打撃音は〕山岳地の一つの大岩の上で恐怖して駆けてゆく鹿たちが立てるひずめの音そっくりでした。(二三・六二)

六二

「今日、これらのヤクシヤたちを戦闘において打ち負かせば、多くの人々にずっと長い間平和が訪れるはずだ。」  
— そのように考えて、彼は〔悪い生き物にも〕大きな憐れみの心をもつ者でしたが、力と強さを無駄にしま  
い込むことなく、弓を握りました。(二三・六三)

それらの絶えず飛んでくる矢は、菩薩を少しも傷つけませんでした。彼がもつ福德(功德)の力がじつに大き  
かったのです、それにより害されることがなかったのです。(二三・六四)

ヤクシヤたちを射貫く鋭い矢を彼が素早く発射する時、〔矢を〕握る手が絶えず耳のへりに接している〔その速  
射の〕有様は、まるで〔手と耳が〕ずっと繋がっているかのようでした。(二三・六五)

ヤクシヤたちが射た矢は〔どれも〕彼の鎧において無効果でしたが、それはまるで人に幸運が欠けている時に

は、達成困難な対象に対しては様々な願望が〔すべて〕無成果になるようなものでした。〔三三・六六〕

幅広い戦車は〔その時〕まるで祭壇のようで、弓の音は供物を捧げる時の高い叫び声のようでした。大弓は高く立てられた犠牲獣の繫柱のようで、かの王子はホートリ祭官のようでした。〔三三・六七〕

(a) 神々やシッダたちやナーガ(龍)たちが観ている、(b) 絶えず飛び交う『矢』という〔祭式の〕薪の山がある、

『戦闘』というアシシュヴァメーダ祭において、ヤクシャたちは自ら犠牲獣となったかのようでした。〔三三・六八〕

◇ さて、それらの〔弓に〕射られて生き残ったヤクシャたちが力尽き、矢に傷ついた体から血を滴らせながら潰走した時、その場で一匹のグヒヤカ(ヤクシャ)がやって来て、菩薩に言いました。

「主よ、私はあなた様の繁栄のための協力者になります。それ故、その弓をもう下ろしてくださいませようお願いします。閣下、この土地において地に埋蔵されている巨大な宝蔵の富を私はお示しします。」〔三三・六九〕

◇ 「了解した」と言つて、菩薩が〔不戦の〕相互の誓約に同意すると、そのヤクシャはやって来て、宝蔵の守護者が管理する夥しい伏蔵(地下の宝蔵)を掘り出して、差し出しました。またかの〔ヤクシャ〕はあらゆる地方に遍く、菩薩の徳性の偉大さを告げ知らせました。すると諸地方の民は歡喜心をいだき、車や牛や水牛や駱駝の上に生活用品と様々な商品を満載して、

他の、税が重すぎる国々や、盜賊だらけの国々を捨てて、盜賊がおらず、〔酷税などの〕不安が無い、その偉大な都城へとやって来ました。〔三三・七〇〕

そして再び、市場は途絶えることなく毎日商品を買ったり売ったりする人の群でいっぱいになりました。〔三三・七一〕

再び、〔象をつなぐ〕沢山の繫柱は、(a) 潰されたカルダモンの匂いがする、(b) 鉛丹によって朱色である額の隆起をもつ、雄象たちの〔流す〕マダによって芳しいものとなりました。〔三三・七二〕

再び、王宮の中庭は、晨朝にカナカヴァルマン王が王座に着座する時、押し合いへし合いする人の群でなかなか通れなくなりました。(二三・七三)

再び、郊外の土地は、月の光のように清らかな運河の水がサトウキビ農園で振りかけられ、また犁の刃で掘り返される時にムスター草(カヤツリグサ科マハスケ)の「ような」芳しい香りを放つ畑の土壤に生まれ変わりました。(二三・七四)

再び、(a)至るところ花々に覆われ、(b)仔牛たちに混雑している中庭がある家々で、若い妻たちが搗いている杵の音が、腕輪の鳴る音を伴って、聞こえるようになりました。(二三・七五)

再び、「国じゅう」何処でも、女たちは花々をそなえた「家の」戸口にバリ供養(「食物」)を捧げ置くようになりました。また再び、婆羅門の「唱える」真言の絶えざる流れによつて浄められた澄んだバター(の供物が、祭火に注がれるようになりました)。(二三・七六)

再び、日が暮れる頃になると、森の奥から「自分が」戻つて来たことを揺れるカウベルの音によつて知らせながら、重たい乳房という重荷のためとてもゆっくりした足取りで、雌牛たちが牛舎に入ってくるようになります。(二三・七七)

再び、晴れ渡つた月の輝きのある夜には、円形劇場において(a)「聴衆の」拍手の音に伴われた、(b)情感のこもつた、(c)耳に快い、女たちが「唱う」甘い歌声が聴かれるようになりました。(二三・七八)

再び、「攪拌棒を押しながら」少しお尻を振るので上着も揺れている「女たち」、満開の亜麻の花のように群青色をした厚地の上着を着た牧牛女たちが、夜明け頃に、山の中の牛舎において、カピッタ果(ウッドアップル)の香りがする凝乳を攪拌するようになりました。(二三・七九)

再び、その「王国」では(a)雲から多量の雨が注がれて穀物が見事に実り、(b)夥しい雌牛たちの歯で「放牧地

の) 徒長した草の茎葉の先がどれも切り揃えられ、(c) 訪れた客人たちで中がいつぱいの村の集会場がある、(田園の) 諸地方は美しさに溢れた光景を取り戻しました。(二三・八〇)

◇ さてカナカ王は、日を追うに従って耳に快くなる一方の、息子(カナカヴァルマン)の偉さを耳にするうち、その彼に敬意を示すために、使者を派遣しました。その「使者」は守衛によって「到着が」報じられた後、入ることが許され、着座を勧められました。彼は坐ると、無事を尋ねる挨拶から始めて、菩薩に「次の様に」語りました。

「ああ、あなた様は両腕に無尽の力をお持ちであり、ああ、格別な勇氣によってお心は常に堅固です——王よ、あなた様はたった一人で、生まれつき獯猛な性をもつヤクシャどもを打ち負かされたのです。(二三・八一)

この場合、(a) 稀有なる光輝にかがやき、また (b) 果敢さを具えた心をおもちの、あなた様にとつて、この「しわざ」はといったに甚だ驚くべき事でしょうか? 「いいえ、」ライオンは象の群を見ても、心の力によって、決して臆することがありません。(二三・八二)

世の人々を苦しめている(「国家の」) 棘を抜くという偉業は、汚れない気高い心をもつ者たちにとつて、ひとえに利他のためなのです。「喩えれば」月光によって生類を涼しく快適にすることは、冷たい光線を発する月のもつ自性にほかなりません。(二三・八三)

◇ そしてあなた様のような大威力ある守護者たちがいることで、この国は保護をなす主を得たことになるのです。菩薩は答えました。

「もし人々を殺すヤクシャたちにも勝てないのであれば、どうして「いっそう」克服し難い、かの『煩惱』というヤクシャたちに私が打ち勝つことができるでしょうか。(二三・八四)

また、もし人が造った物である(「この」) 都城に入ること躊躇する不安を私が懐くようであるなら、ましてどうして私は輪廻的生存を断つかの『涅槃』という都城に入れるでしょうか。(二三・八五)

また、もし勇猛なる精進を奮つて（人々が）安心できるものとしたこの国を得ないようであれば、ましてどうして生類の安らぎのために『真理』の国を私が獲得できるでしょうか。（三三・八六）

また、もし私がこの都の大きな繁栄を作り上げることができないようであれば、ましてどうして、仏弟子たちによる〔法の〕相續を、私が〔仏になった時に〕大きく拡がりゆくものにしてゆくことが出来るでしょうか。」

（三三・八七）

◇ 使者は語りました。

「生類の益のために起こした勇氣の心と清らかな知性がおありになるあなた様だからこそ、このような驚嘆すべき多くの偉業をおもちになったのです。偉大な牟尼たちによって住されたかの位（仏位）をどうしてあなた様が得ないことがありますか。それ故、お励みください。（三三・八八）

ああ『憐愍の心』（女性尊格）よ、このお方は諸徳性が集まったみ仏になります。あなたはどうして長い間（このお方を自分の手元に（輪廻界に）引き止めておくのですか。〔王よ〕、ああ知の宝蔵たる方よ、あなた様は『悟り』という女性（女性尊格）によって、まるで熱愛によるかのように、すでに長く待たれているのです。（三三・八九）

◇ 悟りを達成して法王の座にお坐りになった〔未来の〕あなた様の、輪廻の苦を断ち切る御法話を、その時至福を願つて聴聞するであろう者たちは、全くもつて幸せです。」<sup>(13)</sup>

— さあ、このように、かの世尊は〔過去世に〕凡夫の状態の時であっても、世の一切の者を益するために甚だ専念されたのです。そのことをよく考えて、信仰心と善き心根のある、解脱を願う良家の子は、仏・世尊に対して最高の浄信をもつべきです。

『カナカヴァルマン〔王子〕ジャータカ』、〔第三部類の〕第三話〔終わる〕。

## 第二七話 医師ケーシャヴァ・ジャータカ

智慧、勇ましい精進、巨大な淨らかな福德——これら〔を有すること〕はすべて、崇高な思いをもつ偉大な者たち（菩薩）にとつて、世の生類を益するためなのです。（二七・二）

◇ このように伝え聞いています。 — (a) 様々な学問書に親しむことで澄んだ心を保ち、(b) あらゆる生類に対して家族のように親身であり、(c) 正しい訓育の具現のような方、(d) 他を利することのみを目的にして行動し、(e) 大樹が疲れた鳥たちの集まり来る所であるように人間がもつべき徳性すべてが集まり来る器たる方、(f) その優しい言葉遣いはすべての人々に快く、(g) 『教えの詩』（善説）のうまい作り手であり、(h) 世間通であり、(i) 誠実で、(j) 無放逸で、(k) クシャトリヤの家門にとつての旗（表徴）となる方である、ケーシャヴァ（長髪）という名の菩薩（釈尊の前世）が或る時、大都城におられました。

その偉大な心の方（菩薩）はこのように考えました。「いつたい、全く清らかであるような職業とは、— それに従事することによって快くこの私が世の人々のために役立つことが出来る、そんな職業とは、何だろう。〔権力者に〕仕えることは、多くの者にとつて、不正直・尊大・驕慢・加害〔など〕の悪徳の原因となる。その仕事に従事している者は、どんなに努めてみても、決して〔精神の〕静寂を得ることができない。なぜなら、

国王に仕える様々な仕事という汚泥の中で感情や思いが呑み込まれてしまっている雇人たちの心がすっきりと澄み渡ることはありえないからだ。浮沈する多量の泥がある水の中に浸けて洗われているドゥクラ布が、白さを得ることなど決して無いように。（二七・二）

◇ また商売というものも、売り買いの時に嘘の言葉を多用するから、法（真実）に適った生き方では無い。耕作も、棒による打擲や突き棒によって牡牛たちに苦惱を生じさせている。私はまさに医のしわざこそが、あらゆる点

で善なるもの、世の人々に役立つものと見る。だから医学をこそ私は学ぼう。」——そう熟慮した後、彼は長くかかずに、その〔医学の〕十分な習得に達しました。

有徳者である彼が一途な気持ちで病人たちの治療にあたっていると、まるで悪魔を追い払う儀式（護呪）を施されたかのように、その人々の体は病に苦しめられることが全くなりませんでした。〔三七三〕

すぐれた人々が絶えず会話を繰り返している薄暗い夜中に、絵画陳列の館が輝かしくは見えないように。〔三七四〕

世の人々のために熱心に働き、闇を消滅させる彼が、真実を語る者たちの集会場にやって来ると、その集会場はとても魅力的なものに変わりました。あたかも月が昇った時、蓮池がいつそう美しくなるように。〔三七五〕

(a)世の人々のために益をなし、(b)多くの徳性を有し、(c)真実を明瞭に観察し、(d)月のごとき浄らかな心をもつ、偉大な者たちは、徳性をもつ人々の間でのみ、現れ出るのはです。〔三七六〕

このように、世の人々から悩みを取り除くのに巧みであり、まるで夥しい数の徳性の蔵が眼前に出現したかのような人として、智慧を蓄え高めながら浄らかな知性を保つ彼は、どんな人に対しても、知り合ったばかりの人であつても、親類であるかのように親身でした。〔三七七〕

◇ さて或る時、菩薩が聡明な一人の弟子を伴つて異国を旅していたその頃に、或る女性の夫が、病気によつてまるで〔体に〕入り込む隙を見つけたかのように〔襲われ〕、あの世に逝かせられてしまいました。

(a)華奢な両手で〔おのが胸を〕打ち叩いたため重い乳房がうす赤くなり、(b)涙の雫に顔を濡らし、(c)装身具を〔すべて〕取り外し、(d)まるで夥しい数の黒蜜蜂によつて花が覆われている一本のクンダ蔓（蔓性のジャスミン）を思わせる、解いてざんばらになつた豊かな黒髪によつて腰の恥部が覆われている〔姿の〕、(e)まるで〔夫を喪つた時の〕カーマ神の妻のように「ああ、わが夫、あなたはどこに行った」と繰り返し泣き叫んでいる、その妻は〔正気

をなくして」鬼霊(プータ)に取り憑かれました。

彼女は意識の惑乱のゆえ、涙を流している自分の家族に近づくと、こう言いました。「どうして(皆さんは)私の家で今日ここで泣いているのです。私の旦那様はもういかなる危険もなくなつて、本当に生きているではありませんか。」(二七・八)

こう言うと、彼女は落ち着いた様子で、頬笑みながら、月のような「輝かしい」顔をして「お化粧の」額飾りを描き終わると、嬉々としてベッドの上にいる死んだ夫を固く抱擁しました。(二七・九)

「これはどうしてかしら、あなたは今日私に話しかけませんね。いとしいひと、愛の歓びを毀してしまう怒りを解いてくださいな。もし私に咎があるのでしたら、あなたが心でお怒りになつているのも、故無きことではないでしょうけれど。」(二七・一〇)

ああ、眠っているふりをして、薄目を開けているひと！あなたが騙そうとしているのを私が知らないとしても思っているの？——こう笑つて、強く慕い求める心をいなく彼女は、彼を抱きしめると、両頬にキスをしました。(二七・一一)

「でもきつと、あなたは(私じゃなく)月のような顔をした、恋愛好きの、他のどこかの若い女のことを考えているのね。じゃあお行きなさい、願望が実りあるものになるよう、ひたすら頑張りなさい。あなたを私は邪魔しない。」(二七・一二)

遙か遠方に昇つた満月を眺め、ため息をつき、流す涙の雫に視界が覆われた彼女は、「あなたと交わりたい」という願望の重荷に疲れ、ベッドの真ん中で、性的な昂ぶりのあまり、自殺すら願うかのようにした。(二七・一三)

「愛しいひと、あなたは私の言葉を聞いて、きつと怖くなつたのね。それですっかり黙りこくつていたのでしょ。う。さあ、起きなさい、私は怒っていません。」——そう話しかけながら、彼女は指で彼の目を開いてみました。

◇ その時彼女の家族たちは、「この苦しむ可哀想な人は、きつと鬼霊（ブータ）に憑かれてしまったのだ。それで死んでしまっているのに、夫を抱いたまま、このように妄言を言っているのだ」と話しましたが、「彼らも」泣くことに疲れ果てていたため、睡りに落ちてしまいました。

彼女は家が寝静まったのを見定めて、命が失せて動かない体となった夫を肩にかつぎ、夜が終わって灰色をした月の円盤が空に懸かる頃、――

都城の多くの門において門扉が開かれつつある頃、――

町や村の樹々の中で雀たちが盛んに動いて賑わしく会話を始める頃、――

ランプの焰がどれもまるで蛍のように見える頃、――

眠気が残っていてまだ視線が定まらぬ旅人たちがサンダルを足に結わえ付けそろそろと旅立ち始める頃、――

雨曇りの時のように大地がまるでいちめん灰色に見える頃、――

夜明けを告げる太鼓の音でどの寺院の内部も満たされる頃、――

諸都市や村々で鶏鳴がしきりに聞こえるその頃に、その女は、夫と共にいられる場所ならどこでもよいと、あてもなく歩き進んでいました<sup>(14)</sup>。

長い時が経ってぼろぼろになった穢い衣を着、肌が「埃で」すっかり灰色になった彼女は、手をたたいて「囁きたてる」子供らに取り巻かれて「歩いて」いました。(二七・二五)

その彼女を見て、子供らは笑っていましたが、女たちは目に涙を溜めました。また淨らかな知性をもつ男たちは、「ああ、『自分のもの』という想いがこの女を狂わせているのだ」と語りました。(二七・二六)

◇ さて彼女は、時が経過するうちに膿汁を伴って肉や皮が剥げ落ち、漆喰が塗られたような「白さの」骨だけが

残った、その〔夫の〕死体を担いだまま、ある時、山の森の内部や幾つもの墓地〔屍林処〕を彷徨っていました。疲れ果てたので、或る場所で、樹の根元に一休みし、その死体を清らかな水を湛えた池で沐浴させ、「わが夫は酷しい太陽の炎熱で疲れ果てたことでしょう」と呟きつつ、

真つ白な彼の骸骨に、彼女はゆっくり丁寧にあムリナーラ（ヴィーラーナ草の根で作った香油）を何度も塗布してあげました。そして毛髪が抜け落ちたその頭頂部に、鮮やかに青いウトパラ蓮の花環を結んであげました。〔三七・

一七）

さらに彼女は薄赤い蕾の小枝を森の奥から採つてくると、「頭蓋骨の」耳孔のところに付けてあげました。また〔赤い〕鉱石を使って、縫合線が見える白い額の上に額飾り（ティラカ）を〔描いて〕完璧に仕上げました。〔三七・一八）

また、根元から露わになっている〔彼の〕齒列に沢山の臙脂紅を塗って、光沢のある赤色にしてあげました。また真つ白な蓮の根の繊維のように輝く白浄の両手に、キンシユカ（ハナモツヤクノキ）の〔橙色の〕顔料を施してあげました。〔三七・一九）

また、か細い灯明の焰の〔煤による〕塗墨で、「頭蓋骨の」二本の眉があった場所を黒くしてあげました。そしてくすくす笑いながら、大きな二つの眼窩の周りを何度も輪を描くように化粧ペンを走らせました。〔三七・二〇）彼女は無雲の〔夜空の〕月光のように澄んで浄らかな水を、蓮の葉で作った容れ物に入れて、にっこり微笑むと、その骸骨を嬉しげに眺めながら、次の様に語りかけました。〔三七・二一）

「〔妻の〕愛によって、あなたのこの体は装飾が済んで、きれいになったわ。愛しいひと、この澄んだ水鏡なのかの、月のような〔ご自分の〕顔を、あなたはまずはご覧なさい。」〔三七・二二）<sup>15)</sup>

◇ 夜が訪れた時、彼女は〔墓場で拾った〕四本の人間の骨を地面に埋め、それらの中央に沢山の若枝を撒き敷い

て、蓮の花弁や葉で〔出来た〕枕を設置すると、かの骸骨に語りかけました。「私の旦那様、いらつしやい。沈水の香煙により芳香をつけた寝室にお入りなさい。子象の牙で作った〔四〕脚をもつ、この柔らかいベッドを私は作りましたよ。」

女は歯で〔香ばしい〕ムスター草（ハマスゲ）を細かく噛み切つてから、彼の死体の顔の上に散らし、それから火に照らされた〔火葬の〕薪の山のそばで、心の狂乱のゆえ、その〔夫の骸骨〕を抱きしめながら眠りました。

〔二七・一三三〕

◇ さて菩薩が一人の弟子を伴つてその都城に到着した時、彼は憑物（ゲラハ）に取り憑かれたその女のことを〔その土地の〕人々から聞いて、弟子に次の様に語りました。

「その人は、非実在の妄分別（虚妄分別）に心が惑わされているため、存在しない物に対しても甚だ強く『自分もの』という想いをもっているのです。〔二七・二四〕

私は〔通常〕薬草をもつて病人たちの病気を消滅に導きますが、しかしその女性の憑物に対しては、一つの方策（方便）をもつて消すことにします。〔二七・二五〕

例えば親指なくして、指は花を掴むことが出来ません。同じ様に、或る方策を用いることなくして、その治療行為は成果をあげることとは出来ないうしょう。〔二七・二六〕

◇ 弟子は答えました。「いったい、知を有する者たちに来れないことなどありませんか？」

かの偉大な心の方（菩薩）は、「彼の」『心』という馬が『憐れみ』という御者に駆り立てられているかのように、そのまま住まいに戻ることもなく、また、すでに人の移動には適さない、太陽が没する時刻であることも気にせず、「きつと家庭に慣れ親しんだその女は、墓場（火葬場）の土地を愛好するに違いない」と考へて〔葬場へと進み、〕

(a) その周辺は燃える火の輝きに照らされており、(b) 鷲や鴉がとまっているニヤグロダ樹（パンヤンジュ）があ

り、(c)象たちの群のように青黒い夜の闇が、まるで火を恐れるかのように遠巻きにしながら佇んでじっと見つめているような「地」、

(d) ジャツカルの群によって喰われている死体があつて、(e) いちめん「落ちてゐる」ごわごわした人髪の網によつて地表がびっしり覆われている「地」、

(f) 火の中で焼かれながら次第に縮まりつつある人体があり、(g) 新鮮な蓮の根の繊維のように真つ白な沢山の骨が散らばつてゐる「地」、

(h) 或る場所では色とりどりの小さな甕のかけらが至るところに隙間無くある、(i) 半分焼け焦げた死人たちの穢い衣裳の端切れがそこらじゅうにある、(j) 腰を下ろした羅刹女たちによつて人間の肉が切り裂かれてゐる「地」、

(k) 或る別の場所では大肉(人間の肉)が荒々しい男たちによつて売られており、(l) また或る場所では焼かれつつある死骸から零れ落ち続ける脂肪の滴りの流れによつて火が消えようとしている木炭がある「地」、

(m) まるで朱色と紺色に染められた二枚の布(を上下に置いたか)のように、その基底は火の焰の輝きによつて薄赤く、その上は雨雲のように青黒い色をした巨大な煙の膜によつて覆われている「地」、

(n) あらゆる人々に世を厭離する想を生じさせようと欲する『無常性』が死者の身体がもつ自性を明らかにしているかのように思える、(o) まるで戦争が行われた土地のようにとでもぞつとさせる「地」である、

(p) 牡牝のジャツカルの群の吠え声やフクロウの鳴き声が起こる「恐ろしい」墓場へ、彼はまるで強い風の流れに揺れ動いている火のまばゆい猛烈な焰から呼ばれてもしているかのように、恐れのない心で真夜中に入つて

ゆきました。(二七・二七)

◇ 「どこかにその女がいなだらうか」と思ひながら彼はあたりを歩き回り、タイテイリー(食肉鬼女)たちのその挙動を観察しながら、弟子のために守護の真言を用いて、火焰の纏縛を施しました。― その場所では<sup>(16)</sup>、

赤褐色の両眉とかつと見開いた目をもつ（鬼女たちの）或る女は、人間の血を使ってテイラカ（額飾り）を描きながら、愛人〔たる羅刹〕が掲げ持った、鋭い刃のある斧に〔映った自分の〕顔を見ていました。（二七・二八）

また別の女は、血の酒を満たした、月のように純白の髑髏杯を地面に置くと、斧を砥石で研いでいましたが、〔刃に円い杯が映った〕その斧はまるで月が揺れ動く水面に映って揺れているかのようでした。（二七・二九）

また別の女は、火の熱さのために目を細めながら、(a) 熱い脂肪が滴り落ちてゐる、(b) 青黒い色をした、半分焼けた人間の死骸を手荒く〔薪の中から〕引き摺り出すと、墓地〔の地面〕に置きました。（二七・三〇）

また別の女は、〔口に〕唾液を生じさせながら、流れた血と脂肪の滴りがべっとり付いた石の上に、人間の頭蓋骨を置くと、破碎から生じる恐ろしい音を立てながら、石で打ち割りました。（二七・三一）

また別の女は、響め面をしながら、(a) 愛人〔たる羅刹〕が掌の上に載せて差し出した、(b) 咲き開いたジャヴァー（ブツウゲ）の花のように真つ赤な色をした、(c) 頭蓋骨の中にある、血の酒を、切り肉を肴にしながら、飲んでいました。（二七・三二）

◇ このような所行に没頭しているそれらの羅刹女たちを観察して、「ああ、なんとこれらの羅刹女の本性は残忍なものか」と考えながら、別の区域に〔進むと〕、

或る場所では肉の食物、また或る場所では幾つもの魚やシードウ酒（糖蜜酒）、また或る場所ではカランバ（燕麦の碾き割り粉）の供物が、地面のあちこちの隅に散らばっているのを〔見ました〕。（二七・三三）

また (a) 墓場の火影の中にその身体が照らし出された、(b) 鞘から抜いた剣を携えた、〔四〕方角の守護神たちによって見つめられている〔大マンダラ〕、（二七・三四）

明呪（ヴィディヤー）の成就を得ようと願って、祈禱の低い呟きに唇を微動させている、一人の物怖じしない、偉大な人物である遍歴行者によって、その中央において加持がなされた〔大マンダラ〕、（二七・三五）

◇ その内側に赤い花々が撒かれ、灰や三叉戟が置かれて多彩である大マンガラを〔菩薩は〕見ました。(二七・三五)  
 ◇ また別の場所では、(a) 血に赤黒く染まった歯をもつジャツカルたちによって腹部が咬み裂かれつつあるために外に出てしまった内臓が震えている、(b) 鳥の嘴に挟り出された〔空の〕眼窩があるその顔が恐ろしい、(c) 『死』という賊にすでに『命』という財産を盗まれてしまっている、若い女〔の死体を〕眺めて、戦慄の思いで語りました。  
 「ああ、このような屍にすら快樂の考えを生ずる、愛欲者たちがもつ欲望の何と卑しいことか。」

〔かつて〕 慄れと熱望に満ちて男たちの『視線』という黒蜂の群が何度も〔飛来しては〕達した〔対象であった〕、その『若い女』という蔓に生じた、『微笑』という愛らしさを輝かせた花を、どうして今日見ることが出来ないのでしょうか。(二七・三七)

愛の神よ、おんみはかつて高揚した心で彼女に向かって弓を引き絞ったことがあったのに<sup>18</sup>、ああ不実な者よ、今日おんみはどうして、その女の死んだ体には、もう全く矢を放つことがないのか。(二七・三八)

愛欲をいだく男たちは、かつて熱望に満ちた心で、皮膚に覆われているそれ(彼女の肉体)を何度も抱きしめたのに、今日、骨から出来た陋屋のようになったそれに近寄らず、彼らは鼻を塞いで逃げ去ってしまう。(二七・三九)

「月の容をもつひとよ、どうして目に涙を溜めてその顔をそむけているの?〔あなたの所にこうして〕やって来た、咎の無い私に対して、無用に怒るのはやめなさい。」——こう夫が弁解しながら、かつて〔そっと〕頭を載せたものだったその女の両足を〔今日〕、大たちが歯を立てて食らいつつしている。(二七・四〇)

愛の神という姿の見えない狩人が苦勞して作った、この『若い女』という、見せかけの美をもつ仕掛け罠——かつてその罠に、愚かな男たちの中で鹿のような心をもつ者、快樂の甘い味わいの幻想を追い求め続け、欲望を生じ続け、疲れ果てる者が掛かっていたものだが、——その〔罠〕がどうして、何のせいで壊れてしまった

のか。」(二七・四二)

◇ このように、かの偉大な心の方(菩薩)は若い女の屍体を観ることによって、嫌悪の思いを生じ、「弟子に」語りました。「ああ、人間の死体のひどい腐敗臭のために臭覚の感官(の刺激)に苦しめられているこの私は、燃焼する薪の山の煙との接触によってまるで自身が穢れてしまったように感じる。同様にこの「月」、――

燦めく光線をもつ月も、この墓地の黒煙によって穢されてしまったかのようだ、――この遠方まで及んで拡がりつつある、雲の腹部の美しさを台無しにする「黒煙」によって。月は「それゆえ」波立つ海の水で沐浴しようとするかのように、濡れた「月光」という衣を着て、冷たさに「全身が」充たされ、なんとか「我慢しながら」ゆっくりと「今や水平線に」没しようとしている。」(二七・四三)

◇ 弟子は言いました。

「普通の人(凡夫)は、自分自身を危険に晒すことになる様な「こんな」苦しい状況にすら耐え得ないため、他者に恩恵を施すことは出来ません。」(二七・四三)

◇ 菩薩は語りました。「友よ、あなたの言うことはもっともです。さあ、今は、墓地の火の輝きによって「シヴァ神の」三叉戟が犠牲獣の血で描かれている壁が照らし出されている、この老朽化したマートリ(母神)たちの神殿の中に入って、夜の残りの時間を過ごしましょう。」

染みが出来たドアの扉の金具がゆるんでいますね――はたほこ(幢)から孔雀の頸(の飾り)が落ちており、床が埃だらけです――「ここは」神に捧げられた花環の紐だったものが山のように室内も室外も覆っています

――「ほら」この鷲が、水牛の頭蓋の上に止まっていますよ。」(二七・四四)

◇ 弟子は言いました。「お師匠様の御教示のとおりに「ここに泊まりましょう。」――その後ケーシャヴァはその母神の神殿中に入って睡眠による休息を得、目を覚ますと、「弟子に」言いました。「君。外に出て、夜が今どのく

らい残っているか、見てきなさい。」―「わかりました」とその彼はかの〔師〕に答え、外に出てくると、報じました。「お師匠様、今まさに夜明けです。なぜなら、

あそのこのフクロウが、夜の終わりを知って、樹のうろに〔戻ってきて〕休んでいます。また薪の火の焰光が、燃料が尽きてきたため、少しくすんだ色になっています。山々の間の空間はまだ影があつて暗いですが、頂はどれも昇る太陽の燦めく光線に触られて、赤い色合いになっています。」〔二七・四五〕

◇ 菩薩は外に出て、弟子に言いました。「君は苦しんでいる人たちの治療のため、都城に帰りなさい。私は夫が死亡したその女性を、何らかの方策（方便）を用いて正常な状態に戻します。」―その弟子は「かしこまりました」と答え、急いで都城に戻ってゆきました。

菩薩は「さて、その気の毒な女性は一体どこにいるのだろう」と考えながら、彼女を見つげるためにあたりを歩き回りました。一方その頃、その若い女は起床すると、彼女の夫の死骸を担って、川に向かって出発しました。その後菩薩は彼女の寢床の場所にやってくると、其処を見て考えました。「きつとここでその可哀な女性は眠ったに違いない。なぜなら、

(a) 蓮の花弁や葉で作られた枕があり、(b) 身体の熱で萎れて黒ずんだ若枝が〔撒き敷かれて〕あり、(c) 臀部に押されて真ん中がへこんだ、この寢床は、ここから彼女が離れ去っていったものと想像できる。」〔二七・四六〕

◇ その時、彼女が夫の死体を持ったまま川の方に進みつつあるのを〔菩薩は〕発見し、「さあ、方策を用いて彼女を正常な状態に戻すのだ」と考えを巡らせてから、かの偉大な心の方〔菩薩〕は一つの女の屍体を肩に担ぐと、その女の後についてゆきました。

さて彼女はその〔夫の〕骸骨を川の岸辺の樹の幹に寄りかからせて置くと、〔それに〕語りかけました。

「旦那様。今、あなたのご顔を洗う水をお持ちするまで、この樹の所に居て下さい。」〔二七・四七〕

お顔を洗ってから、睡りが終わったばかりで少し目が赤くなっているあなたを、牛黄（黄色の顔料）とベチパー油とアラクタ（赤い染料）で化粧してあげましょうね。」（二七・四八）

◇ このように言ってから川に降りていった彼女は、よく磨かれた鏡面のような澄んだ水のおもてに自分の姿が映っているのを見ると、「この女はきつと私の夫を奪いたいと欲しているに違いない」と考え、自分の影像に向かってこのように罵り声をあげました。

「若い女よ、長い弧を描く眉をもちあげて、微笑んで蕾のような歯を露わにしている性悪女よ、あなたは間違はなく恋していて、私の魅力的な愛しいひとを欲しがっているのです。二七・四九

愛らしい笑みをもって、また心を惹きつける流し目で見つめることによって、私の大切な、真面目なこの人を誘惑している、恥知らずの女、どうして私が怖くないの、浮気女よ。二七・五〇

微笑みを露わに示すお前さんなんか、私のこの愛しいひとは、牝ジャッカルほどにも思つてやしないわ。それなのに「誘惑を」やめようとしなさい。馬鹿女。空しく疲れはてるだけだわ。去りなさい。二七・五二

もし女が男と交際して、かたく強く愛されるなら、その女はみんなから一目置かれるでしょう。しかし女が「一方的に」激しく愛しながら、少しも愛されない時、「そんな女を」一体誰が笑いものにしなさいか。三

七・五二

こんなに私があなたを叱っているのに、それでもこの愛しい人を力づくで取るつもりなら、私はあなたの非法に我慢しないわ。嫉妬はものすごく心に苦しいものだもの。二七・五三

私がこうやって、とても手厳しい事を言っているのに、綺麗なひと、あなたはどうして驕り高ぶった様子でそれに高笑いしていられるの。これは『針を売ろうと鍛冶屋に行つて、わいわい騒いでも無駄な努力』（諺）です

か。】（二七・五四）

憑物のせいで正常な意識を失っている彼女はどのように言い、眉を吊り上げ、目を擧めた憤怒の形相で、大声で喚きちらしながら、澄んだ水の中にいる自分の影像に向かって、何度も石を投げて攻撃しました。(二七・五五) このように嫉妬心を起こして岸边に立ったまま、水の中にいる自分の影像を相手に何度もけんかが続いている彼女を、清く輝く歯列をもつその「夫の」骸骨は好奇心を起こして「眺めて」大いに哄笑しているかのようでした。(二七・五六)

◇ その時彼女は、「こうして私から沢山の石で攻撃されても立ち去らないのなら、じゃあ私は旦那様をつかんで、あなたがこのひとを二度と見れない場所まで行くことにします」と、その自分の影像に向かって言うと、その死骸を肩に担いで、歩き始めました。

菩薩はその女を眺めて、「急に」さも恐怖したかのような振りをして、彼の若い女の屍体を担いだまま、逃げ出しました。すると彼女は逃げ出した菩薩を見て、考えました。「この男はどうしてまた、女を担ぎながら逃げてゆくのだろう。この人にまずは尋ねてみよう。」こう考えると、ケーシャヴァに近づいて、尋ねました。

「夫を連れて歩いている私を眺めて、どうしてあなたは怖れて逃げます。私はピシャーチャ鬼女ではありません。せんよ、立派なお方よ。だから疑い怖れるのをやめ、さあここに、私のもとに、いらつしやい。」(二七・五七) 菩薩は答えました。「ご婦人、私はあなたを怖れていません。しかしこの妻はほかの男たちを嫌悪しているため、私は妻をつかんで、どこにも男たちがいない所に立ち去るのです。」

あなたのその夫は、私のこの正妻に向かって何度も色目をつかいながら見つめています。あなたの愛する夫を見て、私の愛する妻は羞恥のあまり、両目をつむっています。(二七・五八)

あなたの愛するこの夫は、このように「妻を」じっと見つめては、何度も物欲しげに口をひらき、また歯を見せて、飾られた微笑みを浮かべたりしていますから、きっと彼は私のこの正妻を奪い取りたいと欲しているの

です。(二七・五九)

この美しい齒、美しい目、美しい両の太腿と乳房をもつ私の妻〔の姿〕を見れば、聖者たちの心すら、様変わりしてしまふでしょう。まして、ご婦人よ、あなたの愛する夫がそうならないわけがありません。(二七・六〇)  
そのため、自らの美しさによってインドラ神の妻をさえ恥じ入らせる、この月の円盤のような〔輝かしい〕容貌のわが妻を、私はこの体に抱きかかえたまま、大自在天(シヴァ神)が妻ウマーを抱持しながらそうしたように、山々の洞窟の中でずっと長く暮らしたいのです。(二七・六一)

◇ 彼女は言いました。「あなたはそんなに不安がる必要はありません。

あなたのその妻が、堅いみさおにより、夫以外の人を嫌悪しているように、全く同じ様に、私のこの夫も、他人の妻を心で想うことをもう止めていますから。(二七・六二)

あなたは自分の愛するこの方を、そして私は愛するこの人を、きれいに飾り立ててあげながら、一緒に暮らしませんか。『美德の等しい者同士、悪徳の等しい者同士は友達になれる』という諺を実現しましょう。(二七・六三)

三

◇ 菩薩は答えました。

「ご婦人、もし本当にご主人が堅い貞潔をお持ちであることをあなたがご存知であるなら、私たち二人はここに、川辺に身を落ち着けて、同じ場所に住むことにしましょう。(二七・六四)

◇ 彼女は答えました。

「一体私が、立派な分別をもつわが夫の堅いみさおを知らないままで、どうして『彼への不安は捨てなさい』とあなたに言えるでしょうか。(二七・六五)

◇ 「ではそうしましょう」と菩薩は同意して、川辺の一樹の根元にその女骸骨を置くと、〔種々の〕美容を施し始

めました。その女も自分のものであるその〔夫の〕屍体に美容を施していましたが、眠りに陥ってしまいました。すると菩薩は彼女が眠ったことを認識し、

真つ白な蓮根の繊維のように輝いている、それら二つの骸骨を首のところで一緒に紐でくくってから、菩薩は足音を立てないようにそつと川べりに行き、急いでその川に〔二体を〕投げ込みました。(二七・六六)

方策〔方便〕を熟知する彼は、それから、「ああ、ああ」と大きな声で悲しげに叫んで、眠っていた彼女を目覚めさせると、「愛しいわが妻を、あなたのあの夫が掠っていつてしまう」と、心から絶望した声でそう告げました。(二七・六七)

◇ 二人は、水に流されてゆくその二つの屍体を見つめながら、「ああ、ああ、なんとということ！」と声を上げながら、その川の岸边に沿って、走りました。

そのように屍体たちを見つめながら懸命に走ってゆくその二人〔の姿〕を、その川は渦に回転する泡をもって、まるで哄笑しているかのようでした。(二七・六八)

◇ かの女は川岸に沿って走りながら、目に涙をいっぱい溜めて、その〔夫の〕屍体に向かって何度も何度も、次の非難の言葉を叫びました。

「香り高いベチバー油のローションなどを塗ってもらって、私に美容を施してもらっていたのに、人妻を奪い取ってゆくあなたは、私の愛への報いをこんなふうには、はつきり見せてくれました。(二七・六九)

私はいつもやさしく話しかけ、手でマッサージをしてあげ、〔あなたを〕手厚く見てあげていました。それなのに、ひどい非情の心をもつあなたは、それら三つ〔のお世話〕も、なんとも思わないのですか。(二七・七〇)

たとえその女がほっそり華奢なことでは、私より綺麗だったとしても、それでも、ああ卑劣なひと、いつも付き添ってきた私をここで捨てるなんて、非道い。(二七・七一)

世間で言われる『女の心は移り気なもの』という、そんな言葉はもう正しくない。むしろその言葉は男たちに  
ついて本当であることが、今日、貞淑な妻である私を捨てたあなたによって、証されたのです。(二七・七二)

このように(a)薄情で、(b)他の女への愛欲に縛られ、(c)憐れみもなく誠実さも消え失せた、あなたには、この  
惨めで哀れな私の語る言葉など、「一瞬も」心に残らないのでしょうか、熱せられた鉄板の上に落とされた、少し  
の水滴のように。」(二七・七三)

◇ このようにかの「逃げ去ってしまった」屍体を責め立てながら、不意にふさぎ込んで次の一瞬にはまた泣き  
喚いている、その彼女に向かって菩薩は話しました。

「(a)心に愛情がなく、(b)羞恥心をもたず、(c)世間の非難から顔を背け、(d)欺すことがうまい、そんな悪人を、  
愛情の故にこのように非難したとしても、それは惑乱して森の奥で「独り」叫び散らしているような、無意味  
なことです。(二七・七四)

◇ 私はあなたに何度も言いましたよ——あなたのあの夫は私の妻が恥ずかしさに顔をうつむけているにもかかわ  
らず、笑いながら色目を使ってじろじろ見つめています。疑いなくあの人は私の妻を欲しています、と。そう言っ  
ても<sup>⑩</sup>、しかしあなたはそれを信じませんでした。」——そう言いながら、かの偉大な心の方(菩薩)は次の様に悲  
しみ嘆くふりをしてみせました。

「あのひとは溢れる涙に目を霞ませ、泣き叫んで、私の名を懸命に呼んでいました。ご婦人、あなたのあの命に  
等しい人(夫)は、私の愛する妻を奪ったのです、太陽が「美しい」夜を奪い去るように。(二七・七五)

常に同伴していた雌象を失った雄象のように、私はあのひとを失っては、心を平静に保つことは出来ません。  
また彼女も私なしでは、平静な心を保てないでしょう。雌鹿が雄鹿と離れて、心を取り乱してしまうように。」

◇ このように悲嘆してみせた後、菩薩は衣その女の首に巻きつけて女を縛ると、「無理やり」引き立ててゆきな  
がら、こう言いました。

「さあ、来なさい、訴え出るため、われわれは王宮に行きます。さもなければ、私の、あの悪漢に奪われた妻を  
連れ戻すことです。」(二七・七七)

◇ そう言つて、菩薩によって引き立ててゆかれる時、彼女は恐怖のあまり絶望した心で言いました。「あなた様、  
どうかお情けをお願いいたします。どうして今さら、私があなたの妻を連れ戻すことができましようか。」

私には、すこし胸が膨らみ始めた、「年頃の」娘である妹がおります。私はあなたに彼女を授けましよう。「師  
が」勝れた弟子にヴィディヤー（聖なる知）たる女を授けるように。」(二七・七八)

◇ 菩薩は答えました。「天女であろうと、私には他の女性は要りません。私のあの美しい容の妻をこそ、連れてき  
なさい。」

愛らしい眼をしたあの私の妻をもしあなたが連れてこないなら、この大きな石で、あなたの頭を叩き潰してや  
りましょう。」(二七・七九)

◇ そうして菩薩は石を振り上げると、本当にその女を打たんと欲するかのような険しい眉の表情を示しました。  
その女は怖れて、「あなた様、どうかご堪忍を。哀れな、身寄りの無い女を、あなたは殺すのですか。――

たとえ咎があらうと、生まれつき怯弱である女たちを、善良な人々は憐れむものです。揺るがぬ知性をおもち  
の方、どうかこの怒りをお収めください。私は殺されるべきではありません。」(二七・八〇)

◇ そう言つて、菩薩の足元に跪きました。するとかの偉大な心の方（菩薩）は彼女が怖れ慄いているのを理解し  
て、言いました。「もしあなたが私の言葉に従うなら、私はこの石をあなたの頭に振り下ろすことはしない。」――彼  
女は答えました。「寛大なお方、おっしゃってください。私はあなたのお命じになることに背きません。」――菩薩

は言いました。「もし背かなければ、あなたは幸せな女になれます。ではお聞きなさい。

あなたが肩に担いで運んだ、既に死んだ人の、あの屍体は消え去った。―そう、しっかりと認識して、昏い闇を捨てるように、「その」心の迷妄を捨てなさい。(二七・八一)

私たち人間は、繰り返して『運命』の手に戻っては、何度も何度も上下に落ちたり昇ったりしている、お手玉のようなものです。(二七・八二)

凄まじい勢いの風が来て、生じたばかりの雲のかたまりに襲いかかるように、『無常性』というこのものは、どんな者の「美しい」姿の上にも不可避の勢いでやって来て、不意に破壊しないではおきません。(二七・八三)

ユガ(宇宙の存続期間)が終わる時、「終末の」猛火に焼かれて、巨大な海すら、たちまち腹を上に向けて浮かぶ魚に満ちあふれ、地底界に住む恐ろしい蛇たち(ナーガ)も含めて、「燃えて」消滅するにいたるのです。(二七・

八四)

(a)その内部が色とりどりの如意樹に飾られ、(b)天女たちが水浴びに使う蓮池がある、かのスメール山(須弥山)すら、「終末の」火によってその黄金の山塊が溶けてしまい、わたのように軽いものとなるのです。(二七・八五)

アスラ(阿修羅)たちを懲らしめる、インドラ神の輝かしい栄華も、心を奪う美しさの神々の都を捨てて、どこかに消え去ることでしょう。雨雲が消滅する時、稲妻の美しい閃光も消え去ってしまうのと同じように。(二七・

八六)

闇という天蓋の覆いを破り、世界を照らすものである、これら、昼と夜のための二つの「天の」額飾りのような、白の円盤と銅の円盤たる、太陽と月はもう「その時」照らすことはありません。(二七・八七)

この三界において発生を得たものは、何にせよ、すべて常に滅びという終結を迎えるのです。このことを理解して、誕生と死と不幸を常に伴っているこの世界を捨て放って、心を寂靜へと向けるべきです。(二七・八八)

愚かにも、親縁の者に愛を捧げるならば、必ず最後には悲しんで後悔するに至ります。「譬えは」船なくして一体誰が、水中に恐ろしいマカラ（伝説の海獣）の棲み処がある海に入り込むことをするでしょうか。三七・八九  
過去に、愛する人々との別れが無かった人が一体いるでしょうか。そして現在、そして未来においても、それが無い人がいるでしょうか。すぐれたご婦人よ、「夫への」悲しみを払いのけなさい。」三七・九〇

◇ 以上の菩薩の言葉を、きちんと受けとめ理解したかの女は、正しい意識状態（憶念）を取り戻し、語りました。「ああ、あなた様のこの『教え』という灯明によって、それがなんであったにせよ、何処から来たにせよ、虚妄分別によるものであった、「私の心の」闇が消え失せました。」

あなた様により、私の心が健康を得ることができましたように、同じ様に、あなた様もどうか正しき道によって涅槃を獲得なさって下さい。」三七・九二

◇ 菩薩は元の状態に戻ったその女を連れて、家族のもとに連れてゆきました。

彼は「その後」、「このような方策（方便）を用いて、私はその女性の憑物を取り去ったのです」と自分の弟子たちに話しました。

偉大な心の方（菩薩）がその地に滞在している間、種々の病気はまるで「彼を」恐れたかのようにその都城から消え去りました。

その地で、或る利発な弟子が、菩薩を次の様に誉め讃えました。

「あなた様の智慧は…（原文欠損）を凌駕したため、\*賢者たちの知をあなた様の智慧は超えるに至りました」<sup>20</sup>。

三七・九二

\* 真理の見者たちや隠遁者たちの師よ、あなた様の、重い言葉で出来た、「真偽を」確定するお話が「世に」拡がるならば、家の中で灯明を点火したかのように、賢者たちの心はもう闇に支配されることがありません。三

\* 集会場において、賢者たちの大きな「闇」(タマス)を滅ぼすため、あなた様のお言葉の「真偽の」識別が、無煩惱(「の境地」)を得ていないが故の「彼らの」疑念を断ち切つて、無知が「再び」生じることがありません。「譬えば」夜に現れて拡がる螢たちの光は闇を滅ぼすことがありませんが、ランプの汚れない舌(焔)だけが薄いそれ(闇)を残りなく除去します。(二七・九四)

\* あなた様はご自身の『家門』という空に懸かる月です。あなた様の名声は「月の周囲にある」星々です。あなた様の声は、厚い闇を消滅させる月光です。ああ、満月の出現によつて夜の初めに蓮池のクムダ睡蓮たちが「目覚めて」開花するように、「真偽」確定のお話を開始する、円満なる「月の如き」この方によつて、聴衆たちは覚醒に至るのです。(二七・九五)

\* 観念的な哲学教理においても鋭い(理解が早い)あなた様がお説きなつたことがどれほど多くても理解できる(弟子)、真理を見たあなた様の解脱について聴聞した弟子は、真理をはつきりと見ます。「譬えば」以前には「母牛との」出会いを熱望し、好きなだけ乳を出す母牛からうんと飲むことによつて、後になつて、搾乳の人々を厭わない心をもつゆえに、快く「他者に乳を与える」乳房を有する「雌牛」の如く。(二七・九六)

◇ \* それ故、われら生類は「今」救い主を有しているのです。正法を具えもつお師匠様だけが、まるでそれ(正法)自身が「地上で」肉体をそなえた如くに、教授をなされるのです。― そう、「弟子は菩薩を讃えて」語りました。

― \* さあ、このように、かの世尊が菩薩であつた時、生類を利益する目的のため、自発的に智慧によつて「真理を」明らかにされたのであり、「それは決して」自分の名声への執着によつてではない、と「あなた方は」考え、絶えず世尊においてのみ、信心を起すべきです(二七)。

『(医師) ケーシヤヴァ・ジャータカ』、『第三部類の』第七話(終わる)。

### 第二四話 シエーナカ仙ジャータカ

沼地にいるかのように、『感官の対象(の享樂)』という泥沼に沈んで抜け出すことが出来ない世の人々を救い上げるために、賢者たちは般若(悟りの智慧)から生じた方便(救済の手立て)をそなえて、努力するのです。三

四・二

◇ 次の様に伝え聞いています。 — (a) 学問の深さ・自己抑制(戒め)・喜捨・丁重な態度・忍辱という『徳性』の宝蔵である(「お方」、(b)あらゆる集会においてその知性の偉大なることが喧伝され、(c)その徳行においては秋の季節の如く澄み切って高い『家門』という空の上に懸かる月のようであり、(d)月輪に似た(輝かしい)蓮の顔をもち、(e)蓮華の花托(苞)のように白淨の体をもち、(f)〔地上に〕具現化した『政の全き達成』(という女神)から抱きしめられた心意(マナス)を有し、(g)わずかたりとも『感官』という敵に敗れること無く、(h)『悪徳』という敵対勢力に打ち勝って、味方の勢力のような(沢山の)『徳性』を得ている、(i)まるで一点の疑念も残さない『法』(正義)そのものが(人として)肉体化したかのような、(j)好適な機会を見逃さず、(k)一瞬たりとも邪な『悪徳』につけ込む隙を見せない、(l)カーシ王に仕えるシエーナカという名の、菩薩(釈尊の前世)である大臣がおりました。

彼の知性は、一人の女園丁のように、或る幾つかの意見を(咲いた)花のように採りつつ、或る幾つかの意見を蓄のように捨てました。(三四・二)

諸山の中ではメール山(須弥山)が、また(天界の)諸々の如意樹の中ではパーリジャータ樹が、また諸天体の中では太陽が最も抜きんでいる如く、彼は一切処において賢者たちの中で最も抜きんできた存在でした。(三四・三)

学問書の明晰な理解のゆえに鋭利である重々しい彼の言葉を弟子たちが聴聞するにつれ、まるで秋（の季節）がもつ勝れた性質によって河水がきれいに澄むように、次第に彼らの思考はきれいに澄んでくるのでした。（三

四・四）

◇ このようにあらゆる思想に精通した知性をもつかの偉大な方（菩薩）でも、政の指導書で非難される（為政者のなすべきでない）不道德な行為に過度に心が耽溺したカーシ国王（の振舞い）をやめさせることが出来ませんでした。

彼は機会を見つけて、不道德な行為をやめさせようとして、人のいない所でその王に言いました。「閣下、ヴィデーハ王をはじめとする敵対する他国の王たちがつけ込む隙を〔わが国に〕探している時に、悪習に耽つておられるは困ります。閣下、次のことをご考慮くださいますように。

酒類とは、それを飲むことによつて、人は導師や親に対しても激怒し、また理由もなくすぐに泣き喚き、ふらふら歩き回り、軽率な行為もしでかし、病気の器となり、さらには公衆の面前で陰部を露わにしたり、狂人の如く振る舞います。それは羞恥心を阻むもの、人に迷妄を生じさせるものです。一体誰がそのようなものを飲むべきでしょうか。（三四・五）

また、賭事とは、それで遊ぶうちに、人は非真実を語り、怒りに侵され、不眠となり、自分は負けたと後悔しては、再び勝ちたいという欲を出し、尿閉・便秘を得やすい病気に罹つてしまうものです。―そんな沢山の欠点に汚染されている賭事というものを、一人人の誰がなすべきでしょうか。（三四・六）

また、狩猟にはこんな欠点があります。野獣の恐怖、災難や敵（と遭遇する）恐怖、落馬の事故、あまりに激しい口渴・飢え・疲労の感受、猛烈な日差しによる熱苦、本業が疎かになること、最良の〔良識ある〕人々からの非難、交友関係を失うこと。―これほどに欠点があることを承知しながら、一体賢者たる者の誰が、狩猟

を樂しむでしょうか。(三四・七)

また、女たちへの激しい〔性の〕執着は、体力を消耗させ、学問〔の記憶〕を消滅させ、心的葛藤の種となり、タマス(心の闇質)の原因となります。それはまるで自分自身を愛神の火に供物として焼いて捧げるようなことであって、男〔の身心〕に甚だ悪いものです。(三四・八)

また、国王が発する荒々しい言葉は、家来たちにとっては身分の違いの故に強烈であり、恐怖を生じさせるものです。それはあたかも、毒蛇に似たシューシューという音を発しながら有毒の火が燦めき燃えている焰を、〔人々の前に〕現出させるかのようです。(三四・九)

また、たとえ吝嗇であっても月のような涼やかさをもつ王のほうが、大きな褒美と同時に毒蛇のように猛烈な罰を与える〔王〕よりも、ましであります。(三四・一〇)

金銭の浪費は、分別のある人々から嫌悪される不適切な行為ですから、王たちにとって、それは毒のように遠く避けるべきものです。(三四・一一)

また、もし間諜という目をもたず、勇士らや智慧に勝れた人々から蔑まれ、感官を制御せず〔恣に生きる〕ならば、そのような王にいつ災難が起こらないでしょうか。(三四・一二)

◇ このようにして、〔常に〕打ち勝たんとする者(国王)がずっと長い間『王権』という栄光〔の女神〕を自分のものにしてきたとしても、それらの悪い振舞いが、彼女を消失させてしまうものなのです。

剛腕の王たちが「力づくで」自分のものにしても、また智慧の勝れた王たちが賢明な政策によって守り続けていても、この『王権』の栄光というものは、急に心変わりをするものなのです。まるで愛を捨てて戸口を出てゆく女のように。(三四・一三)

(a) 六種の徳目を失わず(三)、(b)〔自身の〕感官という敵に打ち勝ち、(c) 近隣一円の敵国すべてを間諜という目

で見張っている、大地の主(国王)は、栄光を(しつかり)自分のものにします。たとえ(栄光というものが)風<sub>カゼ</sub>に打たれるたびに揺れ動く火の焰のように心が揺れやすい女の如きものであっても。(三四・一四)

◇ それ故、王様には常にご自身に打ち勝っていただきたいのです。― その時かの王は感官が享樂の対象に捉わられていたため、「それを聞いても」心は虚ろであり、慇懃に答えました。「あなた方のような私の導師たちがお示しになる教えに背くことはいたしません。」― 菩薩が自分の住まいに立ち去ると、

かの王は (a) 小太鼓や笛の音でその内部が満ちた、(b) 歌う声が聞こえ、(c) 優美な踊り子たちがいる、(d) (心の)汚濁の原因である後宮へと、酔いに目を赤くして、入ってゆきました。(三四・一五)

そして「王は」(a) 婀娜つぽいしぐさで愛する女たちの手が差し出した、(b) 咲いたばかりの青睡蓮が飾りとして添えてある、(c) 愛欲の火の燃料となる、(d) 墮落の種そのものである、(e) コーキラ鳥の目のように赤い、美しいワインを飲みました。(三四・一六)

ゆっくり太陽が地平線に没し、鳥たちが徐々に巢に戻ってくる頃、その王の前に召使たちが恭しくやって来て、沢山のランプを燃え輝かせました。(三四・一七)

月が「夜の女神の」ティアラのようにみえる宵の頃、かの王は愛神の棲み処である酒を絶えず飲みながら、唇を綻ばせて微笑んだ、誘惑的な眼をした一人の踊り子の容から、視線を外そうともしませんでした。(三四・一八)

そうしているうち酩酊が深まって意識がぼやけ、「一晩中」繰り広げられた美しい踊りや歌の声のなかにあったかの王は、「西の空に」灰色の月の円盤が懸かる頃になって、夜が過ぎ去ったことにやっと気づいたのでした。

(三四・一九)

◇ さてその「王宮」で、シェーナカの智慧の偉大さに我慢がならない何人かの「王の」遊び友達<sub>トモ</sub>が、カーシ王に次の様に言いました。「王様に対して、シェーナカは離反の心を持っていると私たちは見ます。なぜかといいます

と、私たちが聞いたところでは、あの者はヴィデーハ王と結託して、王様を亡きものにしようとして企てているのとことです。それ故、彼に対して王様は信頼なさってはけません。」— その王は頭が呆けた状態であったため、よく熟慮しないまま、菩薩を愛する気持ちを翳らせました。すると菩薩はそのことの報せを信頼できる者たちから受け取り、或る一人の親友の前で次の様に話しました。「あれら、邪な心をもつ遊び友達によって、あの王様は私について誤ったことを信じ込まされてしまっています。どんな時でも悪人たちの生得的な性質は、もっぱら他者を害する方向でのみ働くものです。

悪人と毒蛇は、どちらも生き物にとつての大敵ですが、私が思うに、毒蛇のほうが悪人よりましです。毒蛇には頭巾のところに大きな宝珠がありますが、悪人の方は全くの悪徳の塊ですから。(三四・二〇)

ニンバ(インドセンダン)の葉は、酥油に包まれた時、自性から生じた「にが辛さ」を捨てます。しかし悪人たちは、善人たちに囲まれていても、人を苦しめる辛辣な言葉の烈しさを捨てることはありません。(三四・二一)

人に死の恐怖を目の前に突きつける、毒蛇が牙にもつ猛毒を、医師たちは解毒薬や呪文によって鎮めることが出来ます。しかし悪人という蛇のもつ、大きな恐怖を与える言葉の毒は決して消せず、死ぬ時までずっと心は苦痛を受け取るのです。(三四・三三)

王の権力から生じる高い位は、まるで (a) 沢山の穴があり、(b) 高く聳えながら、(c) 刹那に毀れてしまう脆さをもつ、(d) 恐怖を生じさせる、(e) 蛇たちの居場所になっている、(f) 夥しい塵埃が積み重なって出来ている、蟻塚のごときのもですが、もしそれを遠く避ける「生き方をする」ならば、自足の歓びを得たその彼を、それから生じる災いが少しでも触れることはありません。(三四・三三)

もし「懸命に仕えても」なかなか悦んでくれない王のお気に召すことが運次第であるなら、智慧や家柄や力量が無くても「運のよい」家来が栄華を見ることでしょう。もし獣王(ライオン)がやたら安易にお気に入りの友

を作るなら、彼に付き随う家来は〔卑しい〕ジャツカルであっても、象王の肉にありつけることでしよう。(三  
四・二四)

◇ それ故、あの王様は私のような者たちが仕える器ではないのです」と語って、「菩薩は」家族も親友たちも財産もすべて捨て、黒羚羊の毛皮と木の皮の〔苦行〕衣と水瓶を身につけると、自負心も願望も〔王宮で〕無結果に終わった者として、まるで戦車に乗り込むかのように、堅い決意の上に乗って、(a)いつも容易く果実が得られる、(b)清澄な水を湛える川に接触して冷たくなった風のある、(c)多くの鹿の群や鳥の群に満ちた、(d)苦行を成就した聖者たちの居住地である、(e)とても快適な多数の樹々のおかげで太陽の熱い光が降り注がない、或る山奥の隠遁所に身を落ち着けると、苦行をなしました。

かの偉大な心の方(菩薩)は、順次に四段階の禪定を獲得し、禪定者たちの中の最も勝れた者、偉大な苦行者として、五神通〔の境地〕に住しました。(三三・二五)

その大臣であった者が苦行をなし、最高の寂靜を得たのを眺めて、マール(魔)はまるで負債者が債権者を遠く避けるように、恐れながら立ち去りました。(三四・二六)

◇ ある時、(a)胸の所に弓を懸け、(b)鎧を着け、(c)無垢の装身具の宝石の光線に包まれた、(d)金箔が白く輝いている大柄な体をしたカーシ王が、燦めく馬具のカシャカシャと鳴り響く音に鳥の群を驚かせる、見事な戦車の上に乗って、狩獵への期待に胸を膨らませながら、菩薩を庇護主として戴くその森の奥に入ってきました。

(a)弓が巧みで、(b)戦車の凄しい勢いのために揺れる装飾品の輝きによってその丸々とした両腕が照らされている、かの王は、激しい勢いで逃げる獲物たちを追いかけてながら、迅速に車を進ませました。(三四・二七)

鹿たちのように大きく美しく揺れる目をもつかの王は、極めて遠方から鹿を追跡し、矢を弓につがえ、素早く目のきわの所まで弦を引き絞りました。(三四・二八)

まるで震える二つの蹄で虚空を測るかのよう、雄鹿が雌鹿を伴って遠くへ逃げてゆく時、かの王は御者に馬のはみの綱を弛めさせ、素早く矢柄を弓の弦から放ちました。(三四・二九)

◇ その時菩薩はカーシ王を遠く眺めて、「あの王様が私の居る領域に來られた。そこで私があの方を、(a) 悪い世界〔への再生〕の原因である、(b) 邪悪な仲間が群がりくる、(c) 貧しい快樂を味わうだけの、『王たること』から救いだして、正しい道に案内して差し上げよう」と考えると、たちまち大神通力によって、

(a) 「取り巻く」四方の空間が雄象たちのマダの匂いを薫らせ、(b) 刀・槍・投槍・戟〔の林立〕が恐ろしく、(c) 高く掲げられたはたほこ(幢)の尖端が森の木々の枝とぶつかり合っている、

(d) また軍鼓が水を重荷とする雨雲のような莊重なる音を響かせ、(e) バラーカー鶴のように真つ白な法螺貝の耳を聳する音があたりを満たし、(f) 車輪のリムが地面に深い轍を作りながら、諸戦車がこちらに向かつて来る、

(g) また兵士の群が「こっちだ、こっちから攻める。今どこに進軍を命じられたか」など、がやがやしゃべっているのが聞こえ、(h) 引き絞られた弓や着込んだ鎧が見え、(i) がらがら音を立てて鹿の群を怯えさせて、とても騒々しい、(j) いくさを始めようとしている〔敵国の〕ヴィデーハ王の軍隊を、すぐ近くに彼は出現させました。

〔その襲い来る軍が立てる〕塵埃はまるで〔夜の〕闇のよう、また戦象たちの鼻が発出する水しぶきはまるで星々によって白黒まだら模様になった〔夜空の〕空間のようで、また或る場所で諸王(將軍たち)の王冠の宝石が放つ清澄な揺れる光はまるで〔夜の闇に〕灯された沢山のランプの揺らめく光のように見え、(三四・三〇)

また或る場所で戦象たちの耳から垂れる沢山の法螺貝によって〔いちめん〕光り輝いている様はまるで夜咲きの睡蓮が花開いて輝くように見える、まるで夜そのものであるかのような『軍隊』が、ヴィデーハ王という月を戴きながら、遠くから次第に〔姿を現し〕だんだん巨大なものになりました。(三四・三一)

戦車に乗った或る一人は、矢をつがえた弓の弦を、耳の端に接するまで引き絞りました。また或る一人は、燦

めく蛇の胴体のように色が青黒い剣を鞘から抜き放ちました。(三四・三三)

また別の男は、一頭の、流れるマダの滴りのため顔面が芳しくなった、金鈴をつけた雌象たちに囲まれている雄象を、額の隆起部に操縦鉤をあてながら、気ままにパンパンと叩いていました。(三四・三三)

またチャーマラ（私子）をつけた疾走する馬に乗った別の男は、弓を掴み、広い胸から「弓を」取り外すと、「握った」指のため矢羽がばらけた一本の鋭い矢を、矢筒から抜き取りました。(三四・三四)

◇ その時こちらに向かってやって来るその軍を見て、カーシ王は恐怖のあまり震えあがりました。「今、誰に私は庇護を求めよう。そくだ、かの偉大な人、シエーナカがこの苦行林に入ったと私は以前聞いた。きつと彼こそ、苦行力によって私をあのヴィデーハ王の軍から守ってくれる。」——そう考えて、御者に言いました。「御者、御者よ、この私の車を、聖道を知るかの偉大な人、シエーナカのいる苦行林に行く道へと走らせなさい。」(三四・三五)

「かしこまりました」と御者は答え、「馬を」鞭で促すと、速力を増大させ、手綱を弛めてやって、膨らんだ鼻腔から荒い鼻息を出す馬たちを全速力で走らせました。(三四・三六)

すると苦行力を蔵するかの「菩薩」は、苦行林からすぐに出てゆき、数珠が乱れ絡んだ手を差し伸ばしながら、「怖れを捨てて、この隠棲処にお入り下さい」とその王に語りました。(三四・三七)

そして、恐怖に苦しめられた「その王」を手で支えて、最上の戦車からゆっくり降りさせると、かの偉大な聖者（菩薩）は鹿や孔雀やチャコーラ鳥が至る所にいる苦行林へと導きました。(三四・三八)

かの王は深い疲労に覆われた心で、希望を抱いて、隠棲処に進みました。戦車や馬や歩兵たちが入り乱れる軍隊は、聖者の意志によってかき消えました。(三四・三九)

◇ その時かの王は丁重な挨拶の言葉を述べてから、或る場所の、隠遁の地にふさわしい「粗末な」一つの座席に腰を下ろし、周囲に視線を投げて見回すと、もはやかのヴィデーハ王の軍隊をどこにも見なかったので、菩薩に言

いました。

「あの、(a) 白く輝きながら、(b) 雨水を失ってとても軽くなり、(c) 風に打たれて〔走る〕、雲の連なり」のようであつた敵の軍隊は、私があなたの苦行林に入った途端に、急にいったいどこに行ってしまったのだろうか。」〔三

四・四〇〕

◇ シエーナカは答えました。「大王よ、あなたを教え導くために私はこの神通の大きいなる力を示したのです。どうしてここにヴィデーハの軍が来られるでしょうか。ですが、

〔このように〕 敵国から脅かされるばかりでなく、親族から脅かされることもある、沢山の降りかかる危難に満ちたもの、それが王権というものです。理知的な人でしたら、それを誰が求めるでしょうか。〔三四・四二〕

「この者は追放せよ。この者は処刑せよ。この者は全財産を没収せよ」——と、このように王たちが思考すること、それだけでも、地獄に導く〔業〕なのです。ましてそれを実行すれば、いうまでもありません。〔三四・四三〕  
それ故、命の終わりに大きな恐怖が待つ、わずかばかりの王権の幸福を打ち棄てて、純一に善なるものである『出家すること』に、あなたは〔人生の〕依り処を得るべきなのです。〔三四・四三〕

◇ 苦行林を嫌悪する人間たちは、自己愛に支配され、悪い諸世界〔悪趣〕への再生を味わうに至る、不善なる行いをしていきます。そして閣下、〔あれを〕ご覧ください。<sup>24)</sup>

薄い雲に似た、供物を焼く煙の拡がる幕によってどの花びらも〔聖化されて〕黒ずんでいる、花咲く樹々が村内の至る所にある〔この土地〕、〔三四・四四〕

〔ここでは〕 禪定によって目を不動にし、感官を鎮めた聖者たちが平岩の上に坐っており、その足もとには鹿たちちがうずくまっている<sup>25)</sup>、——〔三四・四五〕

また祭式のために乳を出す雌牛たちの小さな仔牛たちが尻尾を立てて、遊び戯れつつ小走りに走って鹿や鳥を

追いかけている、――〔三四・四六〕

また蓮池があつて、その周辺が暗緑色をしており、無数の樹々があつて、密集した樹々の影のおかげで地面はひんやり涼しい、――〔三四・四七〕

また蜜蜂が体にとまるのを恐れてひどく視線を震わせた苦行者たちの娘らが花々を採集している、――〔三四・四八〕

また擦りながら回される火鑽り棒の音によって「草庵の中で」火が生じたことを知ることができると、ぐるり取り囲んで草庵の扉に張り付いて「火の分け前を待っている」苦行者の妻たちがある〔この土地〕、〔三四・四九〕  
 (a)「心が」静かではない人々が避ける、(b)寂靜の思いを抱く人々のためにある、この閑寂なる土地を〔どうかご覧下さい〕。世の人々は血縁の者への愛情により、この苦行林に赴くことが出来ないのです。〔三四・五〇〕

人が至福を得るのを妨げているのは愛情です。もしそれがなければ、愛する者との別離という火の悲しみも、生き物たちの心を焼くことがないでしょうに。〔三四・五一〕

自身の愛の故に、これら世の人々は無理やり、してはならない行為を人から強制されているのです。〔それは〕悪い諸世界に生まれる原因となりますから、愛情とは仇敵よりもたちが悪いものです。〔三四・五二〕

自身への愛のあまり、分別を失つて、ただちに世の非難という矢の的となるような、そのような行為を誰がすべきでしょうか。〔三四・五三〕

愛情というものに抱きしめられた時、この世の人々は多くの場合、貪・瞋・痴という敵に我が身を任せてしまいます。〔三四・五四〕

大きな愛情を断ち切れない人々は、たとえ権勢があろうとも、ただちに沢山の悩みや心配に襲われます。ランブが蛾たちに襲われるように。〔三四・五五〕

体が痛むこと、ひどい心労、ため息が出てくること、突然パニックになること、毎晩不安で眠れないこと、昼間でも四方の空間がひどく暗くなること、眼に涙を浮かべること、愛する人々と別れた時に大きく心が揺れること、―必ず、これらの悩み事が、愛情という毒蛇の咬んだ毒によって心に迷妄を得た人々にあります。(三・四・五六)

(a) 『享楽への欲求』という雌象を追いかけ、(b) 『知足』が失せ、(c) 『貪欲』という象遣いに駆り立てられ、(d) 情欲(マダ)に駆られて不正の道をひた走る、(e) 迷乱した『心』という象は、瘡せているため『愛情』という繫柱を毀すことが出来ず、『懇願せざるを得ない立場』という屈辱に、『心痛』という突き棒の傷を耐え忍んでいるのです(三・四・五七)

親族への愛情を、まるで仇敵の如く、毒蛇の如く、凶暴な象の如く、火の如く、遠く避ける人を、様々な苦悩が支配することがありません。その、苦悩の出現を生むもの(血縁の者への愛)を抱きしめて「離さない」無知なる人々を、恐ろしい諸々の不幸がいつも苦しめてゆくことでしよう、まるで不健康な食事が、それを摂る人をずっと苦しめ続けるように。(三・四・五八)

愛情の束縛を断ち切り、輪廻的生存の恐怖を断つために森に赴く者―その彼は、あらゆる賢者たちの中で、諸天体の中における太陽の如く、最高位に立つ者であり、その彼に対してもし愛神(カーマ神)が弓を用いたとしても、鋭い矢は何ら効き目が無く、そしてその彼は「森で」寂靜の安樂を獲得することにより、この世に生まれたことの無上の成果を得るのです。(三・四・五九)

◇ その時かの王は出家することを決意し、菩薩に語りました。

「广大で清らかな知性により名が知られているあなたの、この巨大な神通の力をあたり一面に目撃して、私の心も、苦行によってその自在力を得ようと<sup>26</sup>、急ぎ努力をし始めました。(三・四・六〇)

ああ、もし智者たちにとつて、苦行により、また覚知の力により、神通を得ることが容易ならば、一体この地上でかように (a) 沢山の悪徳にまみれ、(b) たちまち崩壊しやすいものである、『王たること』に何の用があるでしょうか。」(三四・六一)

◇ その時の王は、涙に顔を濡らしている御者に様々な「王の」装身具を与えると、菩薩のもとで出家しました。心悲しむその御者は、その王に対して右邊の礼を行うと、立派な戦車と共にその苦行林から去ってゆきました。

(a) 王がいないことに落胆し心を乱した、(b) 蹄の音を静かに立てる、(c) チャーマラ(馬頭の羽根飾り)の先端が震えている、(d) か細く澄んだ唾液の糸を道の真ん中に零している、その馬たちは、まるで重い荷物を運んでいるかのように、つらそうにその「空の」戦車をゆつくりと運びました。(三四・六二)

◇ その「御者」がやがて王都に達すると、当惑して外に出てきた都の人々によつて「王様はどこにおられるのか」と口々に質問され、

「かの王はシェーナカのもとでデイークシャー(戒を守って身を清める生活)に入られました」と語りながら、悲しさにその御者は眼に涙を溢れさせました。(三四・六三)

◇ その時「王様が出家されたそうだと、人から人へ伝えられて「報せを」聞き知った王の親族たちは、皆混乱状態に陥りました。するとカーシ王の妃は夫が出家したと聞いて、苦悩した心で、甚だ嘆き悲しむ「次の」言葉を発しました<sup>(28)</sup>。

「ああ、栄光の女神とはなんて冷酷なのでしょうかー生まれつき甚だ移り気であり、あのひとをどこかの苦行林に独り残して見捨てて、立ち去るとは。」(三四・六四)

でも、栄光の女神を非難することはやめましょう。私の心もきつとひどく冷酷なのですー雄象に捨てられた雌象のように、あのひとに捨てられても、なお「私は」生きていられるのですから。(三四・六五)

あのひとは若くて、とても繊細で、いつも安楽に暮らしていたのに、どうして苦勞の多い出家生活を決意したのでしよう。(三四・六六)

月光の薄膜の広がりのように真つ白で、よい香りがするドゥクターラ布の衣裳を捨てて、どうしてあのひとは粗い素材で出来た樹皮の衣を着れるでしょうか。(三四・六七)

指先に朱をつけた手で私の額に飾印(ティラカ)を描いてくれたあのひとが、今、その同じ手でどうして〔森で〕ダルバ草を採り集めることができるでしょうか。(三四・六八)

宝石と黄金の容器に入れて持ってこられた、香りが好くて美味しいお酒をあの王様は好んで飲まれていたのに、今は喉の渇きに苦しんで、素手で、あるいは葉で作ったカップで水を飲まれているのでしょうか。(三四・六九)

女官たちが頭を下げつつ丁寧に触れて〔王様の爪磨きを〕なすように、〔王座の前で頭を下げる〕諸王の王冠の宝石の光線に長い間触れられて〔磨かれて〕きた、あの方の燦めく足指の爪の、宝石のような輝きは、きつと

〔今や〕森の大地の塵によって黒くなってしまっていることでしょう。(三四・七〇)

夜明け頃、樹のあちこちの枝を掴んで、そつと静かに周囲にある花々を手で取ろうとしているあの方を、息によって揺り動かされた、幸せな『蔓』という若い女たちが幾度も『若芽』という指で触っていることでしょう。』

(三四・七二)

◇ 大臣たちはなんとか〔動揺しがちな〕心を堅固に保って、泣いている王妃や後宮の女たちを制しながら、かの王の長男に灌頂の儀式を行いました。

一方、かの王は激しい苦行を行い、

菩薩の指導に従い、順々に〔四〕禅定を達成し、感官を制御した彼は、至福に通ずる、最高の寂靜の安樂を得ました。(三四・七二)

——さあ、このように「かつて」かの庇護主（釈尊）は、菩提行（菩薩の辿るべき行道）に従って進みながら、沢山の「生類」を底なしの『欲望』という沼地から救い出して、安らぎに導いたのです。（三四・七三）

〔作品終結の言葉〕 究極の目的（涅槃）を達成させてくれる、敬うべきかの牟尼（釈尊）に対して、あなた方は篤い信（バクティ）を抱いて、どうか至福に向かって進む者でありますように。（三四・七四）

『シーナカ（仙）ジャータカ』、『第四部類の』第四話〔終わる〕。

### 〔比較資料〕 クシエーメンドラ作『菩薩アヴァダーナの祈願成就の蔓』

#### 第一〇六章 カナカヴァルマン・アヴァダーナ<sup>(29)</sup>

心堅固な者（菩薩）たちは、「敵国に」打ち勝たんとする〔王たち〕のように、堪え難い『輪廻』という敵軍を速やかに打ち負かして、強大な『正法』という王権を達成します。（二〇六・二）

世尊が『城の喩え』（Nagaropama）という経をお説きになった時、好奇心を抱いた比丘たちによって質問されたかの〔世尊〕は、彼らに〔次の様に〕お答えになりました。（二〇六・二）

〔輝かしさでは〕天界の輝きに勝る、カナカヴァティーという名の都市がありました。其処にカナカという名の輝かしい王がいました。（二〇六・三）

彼のますます増大してゆく歓喜の最大の抛り所は、息子のカナカヴァルマンと娘のカナカプラバーでした。（二〇六・四）

その娘がしだいに青春期に達した時、〔咲いた〕花房のような胸の美しさを有して、まるで愛らしい春の容姿をもつ蔓草そのものに見えました。（二〇六・五）

カーマサーラという名の若い大臣の息子は、子供っぽい喜びをもって「その王女と」仲良くなり、恋人として彼女と秘かに情を通わせました。(二〇六・六)

心の落ちつきが失われる青春期、花が満開に咲く時期が来た時に、熱愛から飛んでくる蜜蜂を花の群から遠ざけることが、一体誰にできるでしょうか。(二〇六・七)

娘が自堕落な行為をしたことを知った時、誇り高い王は、異常な悲しみの火と怒りの火によって等しく焼かれました。(二〇六・八)

福徳のおかげでもし一族に「自堕落な」娘がいなければ、高い誇りをもつ者たちの「その」一族は尊ばれます。しかし一人の娘はたちまち一族を辱めてしまうものなのです、人に決して乞うてはならないものを乞う行為が「高い人の」体面を傷つけるように。(二〇六・九)

王の命令によって、娘と大臣の息子は処刑人たちに引き立てられてゆき、処刑の地に導かれました。(二〇六・一〇)すると救ってくれるよう、「刑場の」二人から嘆願された、慈悲に溢れた王子(菩薩)は、自分たちの都城から別の或る都城へと、その二人を運び去りました。(二〇六・一一)

その後、激怒した王はその息子(菩薩)をまるで危険な敵のように冷酷に追放し、辺境の地の奥深いジャングルでの客人としました。(二〇六・一二)

父に追放されたかの「善性の海」たる方(菩薩)は、山路や森の地を彷徨するうちに、快適な園林と池が美しい、無人の都城に到達しました。(二〇六・一三)

彼はその地で、まるで都の住民を皆うしななって悩苦しめている都城の精霊(Devata)のようである、「都に」たった一人でいる、妹のカナカプラーを見ました。(二〇六・一四)

彼女は「彼が」兄であることを認識すると、嬉しさのあまり涙を雨のように零しました。都城が空っぽである原

因を彼から尋ねられると、「次の様に」彼に答えました。(二〇六・一五)

「兄様、ニヤグローダ樹に棲む、六十の数の闘士(力士)であるヤクシャたちがこの都城を攻撃したため、とうとう無人になってしまったのです。(二〇六・一六)

「都の」この滅亡の状態において、今や、あの大臣の息子と私の二人だけが残っています。あなたの腕力(戦闘力)の卓越した威力が今、私たち二人の唯一の救いです。」(二〇六・一七)

そう、妹の言葉を聞いた後、王子はやって来たヤクシャらの群を、一匹のヤクシャを残し、矢をもって全滅させました。(二〇六・一八)

コータラという名のそのヤクシャは、彼に保護を求め、召使(ダーサ)になることを認められて、彼の勝利を広く「諸地方に」告知しました。(二〇六・一九)

禍が失せたその都城が、再び都民たちによって充ち満ちた時、王子は大臣の息子を王にし、妹をその妃にしました。(二〇六・二〇)

驚嘆すべき息子(菩薩)の力の偉大さが間諜たちによって報告されると、それを聞いたカナカ王は手紙による懇請によって彼を「自国へ」連れ戻しました。(二〇六・二一)

父によって冠を結んでもらい、王位継承者(副王)となった彼は威光を放ち、「己が」感官を制御した者として、四大陸を有する大地を「転輪王として」統治しました。(二〇六・二三)

その「過去世の」時、その栄光ある王子は私(釈尊)でした。「今世で」輪廻を滅ぼしたように、「その時も」敵(ヤクシャ)の一群を滅ぼしたのです。(二〇六・二三)

勇猛心の故に、『善性』で輝く『正法』という獅子座に坐し、『持戒』という頂髻をそなえ、『正しい識別』という水で得た「仏位」灌頂の栄光をもつ者は、夥しい生存における煩惱の群を伴う無尽の敵の連続を打ち破って、寂滅

を得、一切の勝利者となって、『涅槃』という国土を享受しています。(二〇六・二四)

『都城』に喩えられる、最も淨らかな涅槃が、ヤクシヤに似た諸煩惱を滅ぼした後、或る「過去の悟った」人々によって得られたのです。」— そう世尊はおっしゃり、「アヴァダーナの説法を」終えられました。(二〇六・二五)

— 以上、クシェーメンドラ作『菩薩アヴァダーナの祈願成就の蔓』における「カナカヴァルマン・アヴァダーナ」という第一〇六の小枝(章)。

【注】

(1) 今回の和訳にあたって、第二三、二七、三四話の章で依用した梵文校訂テキストは Straube (2019) である。これらの章は Straube 校訂本において初めて公開された章である。また Khoroche (2017) の英訳を参照した。

(2) ハリバッタ第二三話の第八五詩節で、「また、もし人が造った物である(この)都城に入ることに躊躇する不安を私が懐くようであるなら、ましてどうして私は輪廻的生存を断つかの『涅槃』という都城に入れるでしょうか。」と主人公(釈尊の前世)が語るが、その文にある「都城」(nagara)という言葉に注意したい。(ここ)で涅槃の譬喩として都城という言葉を用いていることから、この第二三話のソースとして使われた本生話が『城喻経』(Nagaropamasutra)の説法と関連していることを推測できる。つまりハリバッタが用いたソースはクシェーメンドラが彼の第一〇六章で用いた『城喻経』の説法の過去世の因縁譚としてのソースと本来、同じものであったと推測する一つの根拠になるのが、この第八五詩節の「都城」の語である。

(3) Divyāvadhāna にある第二〇章 Kanakavarmāvadhāna は、主人公の名が本話と同じであるが、全く別の話である。そちらの話のパラレルについては平岡聡(二〇〇七)、上、五二八頁を参照のこと。

(4) クシェーメンドラの第一〇六章のテキストは Straube (2009) によって校訂され、その解説においてハリバッタの話との内容比較も行っている(S. 337-341)。この二話の違いについて私なりに説明してみると、ハリバッタ第二三話(略号 HM)とクシェーメンドラの第一〇六話(略号 BAKL)の相違点は次の三点のように纏められる。(一) 両話の間で、名前が微妙にずれていること。例…王都の名は HM でカナカヴァティー、BAKL でカナカヴァティー。また主人公の妹の名は HM でカナカプラーサー、BAKL でカナカプラーバー。これらの名前の違いは韻律の都合によるのかも知れない。また HM のカナカヴァティーという名は校訂者による

- 推測された読みであることも考慮する必要がある。(二) 両話の間で、固有名詞を出す・出さないで、違いがあること。例・大臣の息子の名は *BAKL* ではカーマサーラであるが、*HIM* はその名を出さない。また一匹だけ生き残って菩薩に帰依したヤクシャの名は *BAKL* ではコータラであるが、*HIM* はその名を出さない。この違いについては、固有名詞を勝手に作るクシェーメンドラの癖(時々 *BAKL* の他の章で見られる)も考慮しなければならない。(三) 両話の間に、プロットの相当な違いを指摘できる(と)。すなわち、*BAKL* の第一一〜一五偈、第二七偈、第二〇〜二二偈において、*HIM* と話の筋がかなり異なる。この両者に見られるプロットの違いにおいては、そもそも両詩人が用いたソースが違っているからだという見方が当然ありうるが、もう一つ、別の見方として、両詩人は同じソースを用いながら、クシェーメンドラの方が恐らく原典の筋に忠実な態度で話を要約しようとしているのに対し、ハリバッタの方は戯曲の作り方から影響を受けて、ソースへの忠実さよりも作品自体の完成度を重視して大胆に話のプロットを変更した結果、この様な違いが生じたという可能性を考えておく必要がある。プロットとしてはハリバッタのほうが遙かに出来がよいからである。
- (5) ハリバッタにとっての智慧波羅蜜(般若波羅蜜)の智慧は、善巧方便と結びついている。この第二七話で強調されるのは菩薩がもつ利他のための巧みな方便である。また智慧波羅蜜に分類される最後の章である第三四話の第一詩節は、菩薩が智慧から生じた方便をもつことを説く。

- (6) 第二七話に関する資料として、『護国尊者所問経』*Rāstrapālapariprocā* (Fino edition, p. 24) に次の一偈がある。priyaviprayogahata dirivā *stī ca pranaśaripamāvesā / parinocitā kamunayā me keśava vaidyartāya yada āstī // 134* の偈を桜部建 (1974: 165) は次の様に訳す。「すぐれた医師ケーシャヴァであったとき、いとしい夫と死別したことによって打ちひしがれた婦人が、その美貌も知性も儀容も喪失しているのを見て、私は憐れみの心をもって、かの女を癒して悲しみから解き放った。(三三)——このほかパラレルとして新コータン語の文献『ジャータカ・スタヴァ』第二三話の第八四〜八五偈がある。その二つの詩節では、ケーシャヴァという名の熟練した医師であった菩薩が、方策をもって重い硬直した遺骸を肩に担ぐことによって、愛する夫と死別した悲しみの火に焼かれている一人の女性の苦悩の焰を鎮めたことが語られている。Dresden (1955), *Jātakaśāstra*, p. 433, *The physician, Keśava*, vv. 84-85.

- (7) ハリバッタの第三四話の前半部の原型かも知れないと私が考えているのが、『雑宝藏経』の第三四話「二輔相論媾縁」(No. 203: T4, 464b29-465a7) の過去世物語である。その過去世物語ではカーシ国の王(舍利弗の前世)と、それに仕える斯那(*Syena* or *Senā*)と、この名の善い大臣(菩薩の前世)と、悪意という名の邪悪な大臣(提婆達多の前世)の三人が登場人物である。その前世話の前半部で、悪意が王に讒言して「斯那は逆事を作さんとしている」と語ったため、愚かな王はそれを信じて斯那を牢に入れるという事件が語

- られる。善い大臣が悪人の讒誘により、王の信用を失ってしまうというその話の展開は、ハリバッタの第三四話に類似しているといえる。ただしハリバッタの話の後半部にある、菩薩が苦行林にやってきた王に神通によって敵軍の幻を見せて出家させるといふ展開の部分は、『雑宝蔵経』のその話には存在しない。ハリバッタの話の後半部での、神通によって王に敵軍の幻を見せて、恐怖した王に説法を行い、出家させるといふ出来事に注目するなら、そのバラレルとして『アヴァダーナシヤタカ』第八話「バーンチャラー」(Bandanā)を指摘できるであろう。その第八話の全文の和訳は岡野潔(二〇一九)、八五～八九頁にあるので、参照されたい。
- (8) 蔵訳にあるそのコロフォンの文は次の通り。 / *gyal poi stras slob dpon seng ge zhabs 'bring pas mdzad pai skyes pai rabs kyi phreng ba rdzogs so* / (訳：王の息子、阿闍梨 (acarya) [である]ハリバッタが作ったジャータカマーラー、完了。) この文については Thomas, F.W. (1904), p. 742 を参照。
- (9) 国王の有する三種の力については、ハリバッタ第六話の第四一詩節につけた注を参照のこと。
- (10) この第二三話第二と第三詩節は、第八話第一一と第二二詩節とテキストが同一である。その前にある第八話第七と第八詩節は、第九章第二と第三詩節と全く同一であり、また第八話第九と第一〇詩節も第二〇話の第二と第三詩節と同一である。校訂者の Straube は第八話の第七詩節から第一二詩節までの合計六詩節を、本来作品のその位置には無かったが後の時代に増広の目的でハリバッタの他の章から借用して挿入されたものと考えて、彼の校訂テキストから削除している。Straube は韻律の種類も考慮して、それらの詩節は本来第八話には無かったはずと推測する。Straube (2019), p. 476 を参照。インドの詩人が自分の作った同じ詩節を自作品の中で二度用いることをしなかったかどうかは判断が難しいが、ハリバッタのような最高レベルの詩人たちの場合は恐らく Straube の意見を適用することが正しい。第八話の蔵訳を見ると、それら六詩節の訳が存在するから、蔵訳が作られる十二世紀より前に、インドでそのような増広の作業がテキストに対して行われていたのである。
- (11) この「よい香りの言葉を放つ」という表現と似た表現は 324 と 2011 にもある。
- (12) 第二三話第二一詩節 *pāda e* の「申し分のない美しさによって愛される女」の句は蔵訳と大きく異なる。蔵訳では *kun nas 'phros pai so yi nor bu rab snang ba* 「燦めく齒の宝珠の輝きをもつ女 (= \*parisphrad-danta-nani-prahasaya)」と全く別の表現になっている。蔵訳の句のほうが本来の文か。
- (13) この文の後で、写本 B には後の時代に付加されたと考えられる短い散文と二つの詩節がある。それらの文はハリバッタの蔵訳には欠けている。それを訳すと次の通り。 — 「その後カナカヴァルマンはその使者を、自身からの返答の使者として (?) (父王に)

与えて、(以下韻文)

誠信の心(バクテイ)をもつて、燦めく澄んだ輝きをもつ沢山の寶石を、澄んだ光彩を放つ真珠の無数の山を、最高の象たちと血統のよい馬たちの大群を、様々な贈物を、彼は父に送りました。(詩節一)

〔父の〕命令を無視したことに赦しを乞い、父の同意を得て、大臣の息子に妹を与え、大臣の地位に就任させました。また自らヤクシャたちから守った王女を大妃にすると、まさにその地で王国を統治しました。(詩節二)

(14) 梵文の校訂者 *Strandé* は、この箇所にある「その女は、夫と共にいられる場所ならどこでもよいと、あてもなく歩き進んでいました」という文と、その前にある一連の早朝の情景描写とが上手く繋がっていないと述べ、何か両者の間にあるべきテクストが欠落しているのではないかと推測する(*p.588*)。ただし蔵訳は現在の梵文と一致している。

(15) この第二七話第二二詩節の後に、梵文写本には二つの詩節がある(*Strandé, p.538, note 27, 28*を参照)。蔵訳には相当する訳文が無いし、ハリバッタ特有の明晰さと美しさが無い詩なので、明らかにこれらは後の時代に付加されたものである。その二番目の詩節には韻律的に不完全な文が *pada* にある。とりあえずその二詩節を訳してみると、次の通り。

〔彼女が〕輝くマンゴーの実などを、オレンジの色彩美をもつ、鸚鵡の羽に似たパラシヤ(ハナモツヤクノキ)〔の花〕と葉の集積の上に置いて、〔夫の〕骸骨の前に〔伝統の〕規定通りに配置すると、次のように言いました。(詩節一)

「愛する人よ、この果実を食べなさい」と。〔かし〕彼は少しも食べませんでした。「食欲がこの私には〔ありますよ〕」と、口の行為のかたちを〔示す〕女は、彼の面前で果実を食べました。(詩節二)〔*pada* の *may asya* は理解できないので、私は *‘mayi asya* のように強引に読んだ。〕

(16) ここで墓場(屍林)の情景が語られるが、この叙景モチーフはハリバッタの第七話でも用いられた。

(17) この第二七話三七〜四〇詩節にある、若い女の屍体を観ながらその生前の姿と墓場での姿の違いを語る、という表現手法は第七話二三〜二八話でも用いられている。この屍体観のモチーフは僧たちの墓場での不浄観の行と繋がるものである。

(18) ローマ神話の恋愛の神キューピッド(英語のキューピッド)の役割に似たインドの愛の神であるカーマ神は花の弓をもつて男女の胸を射て、恋を生じさせるといわれる。

(19) この文の梵文は *niyatam kama'yai ... > i: i* である。この梵文は明らかに欠損しているため、蔵訳 *nges par di bhag gi bud med 'dod pa zhes zer ro /* を参照した。

- (20) 第二七話第九二詩節 (*anusuthā*) *paṭṭa* 以降、章末までのすべての梵文テキストが失われている。この第九二詩節で写本に現存する梵文テキストは冒頭の *atiricya tava prajñā vartta* だけである。そのためそれより後の梵文の欠損部分 (梵文写本 B の失われた第七三・七四葉にあたる部分) については、専ら蔵訳に基づいて和訳を試みた。蔵訳ではなぜかこの第九二詩節の訳において三つの *paṭṭa* しかなく、たぶん *paṭṭa* にあたる蔵訳テキストが欠けているため、私の和訳もその箇所語が抜け落ちている。以下、蔵訳に基づいて和訳した詩節と散文のパラグラフの文頭には、\* (アステリクス) の印を付けている。
- (21) 蔵訳ではこの二七話の章末の後に、後代の付加と思われる、次の長い一詩節 (第九七詩節) がある。  
「偉大な人物と同等になることを欲するならば、もし知力があるなら、心を他所にふり向けずに、人は最初に諸々の徳性を〔育てることを〕 尊ぶべきである。聴聞など (一) によって、徳性が生じるのである以上、〔聴聞などに〕 怠惰な者に対してどうして敬意を生じるだろうか。財産を愛好する者は無為 (涅槃) (への愛好) を生じることがない。」
- (22) 六種の徳目とは、カルティルヤ『実利論』第六章の冒頭にある、愛欲・怒り・貪欲・慢心・驕慢・〔過度の〕 歡喜を捨てること。その行によって王は感官の制御が得られる。上村勝彦 (一九八四) : 『実利論』上、三五頁を参照。
- (23) 四段階の禪定については、第二六話第九一―一三詩節にその内容が説かれた。シェーナカは梵仙であって仏教の比丘ではないので、その行によって得られるのは六神通ではなく五神通である。
- (24) 以下の第四四―四九詩節で、心安らかな暮らしが営まれる苦行林の情景描写がなされるが、これと同様の平和な苦行林の表現は第四話の第一七―一九詩節にもある。前生話で、仏がない過去世の時に人が世を捨てる場合、仏教教団への出家という形はとれないため、古典的な四つの生活期 (アーシユラマ) に沿う形で、家住期を早めに終えて林棲期に入ることになる。
- (25) 第三四話の第四五と四六の二つの詩節は蔵訳には無い。
- (26) この「苦しむ象」の譬喩は第一四話第一一―一四詩節にも見られる。
- (27) ここで「自在力」と訳した原語は *vasīṭṭā* であり、仏教徒はその用語を内容的に細かく分類している (cf. BHSD s. v. *vasīṭṭā*; Mahāyūtpatti (1989), no. 781)。特に神通を行使する自在力を *riddhi-vasīṭṭā* といふ。
- (28) 王を失った王妃が悲しい思いを縷々、教詩節にわたってつづやき続ける、ここでの語りと同じ表現手法は第八話第三一―三九詩節の箇所でも用いられた。
- (29) 以下の翻訳は Straube (2009), S. 208-213 にある第一〇六章の校訂テキストに基づいた。

参照文献 (先の(一)～(四)の論文で既に参照論文として記した文献は省く)

Straube, Martin (2009): *Studien zur Bodhisattvāvadānakalpalatā: Texte und Quellen der Parallelen zu Haribhāṭṭas Jātakamāliā*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Thomas, F.W. (1904): "Notes from the Tanjur. 6. The Jātakamāliā of Haribhāṭṭa", in: *the Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 36, pp. 733-743.

岡野潔 (二〇一九) : 「Kalpalatā と Avadānamāliā の研究 (Ⅱ) — Jayamuni, TJAM 第14章 (一), SMRAM 第21章, Kalpalatā 第84章 —」『南アジア古典学』一四号、一〇一―一二三頁。

上村勝彦 (一九八四) : 『実利論』上下、岩波文庫。

桜部建 (一九七四) : 『護国尊者所問経』、長尾雅人・桜部建訳『大乘仏典 9 宝積部経典』中央公論社、一二五―一三〇頁。

平岡聡 (二〇〇七) : 『ブッタが謎解く三世の物語』上下、大蔵出版。

※本研究は JSPS 科研費 (21H00470) の助成を受けたものである。